

月下の占術師

惹かれていく、この
月夜とキミに



橋本昂祈

目次

0	1
1	3
2	5
3	8
4	12
5	15
6	19
7	22
8	26
9	28
1 0	32
1 1	35
1 2	38
1 3	41
1 4	45
1 5	47
1 6	50
1 7	53
1 8	55
1 9	58
2 0	63
2 1	65
2 2	68
2 3	73
2 4	75
2 5	77
2 6	80
2 7	85
2 8	87
2 9	91

0

少女は幻想的な月夜の下うずくまっていた。
まだ目も見えてない子猫のなき声のように少女はそっと呟く。

「おかあさん……」

「いのりちゃん。わたしがいなくなってもげんきでね」

「いやだ！ わたしもおかあさんといっしょにいく！」

「わがままいわないの。だいじょうぶだから」

黒き幻影の女は少女の手をそっと解きほぐしていく。

夏の終わりと秋のはじまり。

少女の未来は暗く明るい。

永遠を望めば嘘になる。

おとぎ話の世界から解き放たれたリアル。

とある日の痛み苦しみ。

ONE ANOTHER DAY

心から君を愛している。

そう言える王子様に出逢えるまで。

終わりのなき旅路は続いていく…………

1

東京都大田区蒲田の雑居ビルの薄暗い一室に、橋本アキラは居た。

依頼主の女性は、今年で27歳になる。16歳も年が離れた魅力的な女性を目の前にしてもアキラは無心で鑑定書を見つめていた。クライアントは白いブラウスに黒のパンツ姿で現れた。本心はまだ明かされていない。鑑定書を見る限りでは心の奥深くに闇を抱えているようだった。アキラは直感した。このクライアントと深く関われば必ず事件が起きる、と。

クライアントの女性の名は、遠野祈織。職業は看護師。

彼女の母親はどんな時も『いのり』を大切にするようにと願い名付けたようだ。祈織はショートヘアの前髪をなおしグラスに注がれたジャスミンティーを飲んだ。意を決して口を開く。

「橋本先生。どうですかね？ 果たして本当に私の運命の人はいるのでしょうか？」

考えごとをしていたアキラは不意を突かれた。

「どんな人にでも必ず、運命の人はいます」

顔をあげて反射的に答える。

祈織はほっとした様子で額の汗を拭った。アキラは話を続けた。

「祈織さんはそろそろ結婚適齢期ですけれども、残念ながら身近な男性には縁がありません」

「ということは、まだ出会っていない人ってことですか？」

祈織はきょとんとしてそういった。

「はい。その通りです」

「いつ頃、出会えますか？」

祈織はまるで言葉を覚えただけの幼児が親に質問攻めをするように、なんでも早く知りたい好奇心旺盛な態度をみせている。アキラからしたら一まわり以上年の離れた妹のようにも感じられていて親近感を覚えた。

「もうすぐ。といたいところですが、残念ながら祈織さんは晩婚の相が出ています。それに……」

「それに？ 先生、言葉濁さず教えて下さい！」

アキラは逡巡した後、意を決して全てを話すことにした。この子だったら運命を受け入れて運命を変えていけるかもしれない。

「祈織さんの周囲には、困った人たちが集まる傾向にあります。それがトラブルの元でして、最悪はけが人や死者がでるかもしれません。しかし、祈織さんは、宗教家としての一面もあると言っておられましたね。その持ち前の精神力。そして名前の通り神に祈

りを捧げて生きる姿勢に多くの人々が勇気を分け与えて貰っていることと思います。祈織さんの運勢は平穏無事ではないのかもしれませんが、ただ、ひとつだけ言わせて頂くとするならば【変えられない運命と変えられる運命】二通りの運命がある中で祈織さんは翻弄されることになるかもしれませんが、すべては大器晩成なゆえ起きることです。将来は必ず成功者や有名人など一定以上の地位や財産を持った方と結ばれる。いわゆる玉の興運を持っています。ですので、これが答えになっているかは解りませんが、先ほど申し上げた通り、マジカルカラーの白を取り入れたり、マジカルナンバーの5を意識して日常生活を過ごされてみて下さい。必ず、運気があがりますから」

アキラは赤裸々に話す。相手を励ましているつもりが、逆に勇気を貰ったような感覚になった。

きっとこの子だったら大丈夫。それは長年の経験によるものではあるが、運命を信じたいという不確かでささやかな祈りでもある。

「けっこう波乱万丈なのですね、私。でも、かなり当たっています」

「祈織さんは【可憐な草花】という性質も持っています。たとえ踏まれても踏まれても、何度だって起き上がって這い上がれる強さを持っています。それと、旧家や名家といった恵まれた家庭環境で育っていることと思いますから、優しくすれば万事に吉です」

「先生、今日はありがとうございます。鑑定料ははいくらですか？」

祈織はカバンから財布を取り出そうとした。

「いえいえ、鑑定料はけっこうです。涼子さんのご紹介ですから頂くわけにはいきません」

アキラは必死に訴えた。「じゃあ」と言って祈織はカバンから名刺を取り出した。

「先生、これ受け取って下さい。私の連絡先が書いてあります。先生が何かお困りでしたら、いつでもご融資いたしますから」

アキラは面食らった。まさか、依頼主の方が金持ちであるとは。

「ありがとうございます。さすが涼子さんのご友人ですね。では僕の名刺も受け取っておいてください。何かありましたらまたご相談に乗りますから」

祈織は深々と頭を下げ名刺を受け取った。サマーカーディガンを羽織り「では、また」とお礼を告げ、鑑定室を出ていった。

アキラは鑑定書をファイルにしまいタバコを買いに外に出た。

ふと夜空を見上げる。月光があやしくアスファルトを照らしていた。そろそろ満月も近い。あたりは静寂に包まれている。凜として涼やかな風が吹きぬいていった。この先に待ち受けるであろう、運命の悪戯が脳内をよぎった。

「まさかね」

アキラはタバコを吹かしながら呟いた。

2

「んで、その女とはわかれたんか？」

生卵がはいった取り皿にすき焼き肉をいれて悪友の竹田が言う。竹田とは蒲田の居酒屋で飲んだ後、風俗遊びを共にする仲だ。アキラは竹田の問いかけに戸惑いを覚えた。

「……。別れてはないと思う。けど距離を置いてる」

ぐらぐらと煮える鍋の火を調整しながらアキラは言う。

「なんだそりゃ？ 浮気がバレたら普通わかれるべ」

「まあ、普通はな。うちらは普通じゃないから」

「んで、別れてはないと思うってなに？」

「いや、オレは別れたつもりなんだけど。相手の方が嫌だってつっぱねるんよ。だから、せめて考える時間が欲しいってお願いしてさ。それで距離を置いてる」

「なんか複雑だな。オレそういうの面倒くさくてゴメンだわ」

「まっ、今日はとことん飲もう！」

アキラはお酒に強くない体質だが、せめてもの景気つけの言葉を口にした。買ってきたばかりの冷蔵庫からビールを取り出し、竹田へ手渡す。自分といえばアルコール度数3パーセントしかないほろ酔いのパッションパンチ味を氷で薄めて飲んでいる。

「そういえばよ」

竹田はうつむき加減になり神妙な面持ちで言う。

「なんだ？」

アキラはイカソーメンをむしゃむしゃかみながら適当に受け答えする。

「いつ女紹介してくれるんだ？」

竹田はアキラを睨みつける様に言った。

「はあ？」

アキラは言ったあと半笑いを浮かべた。コイツいよいよ頭までおかしくなったか。

竹田はなかば逆ギレ気味でビールをグビグビと飲んだ。完全に勢いついたようだ。

「アキラの場合、職場も客も女だらけだろ？ 一人くらいこっちよこせよ！」

「よこせよっても、犬猫じゃあるまいし……………」

「最近はいいい女いねえのか？」

「あ！ そういえばいたな」

「まじか？ 芸能人でいうとどんな感じだ？」

「若い頃の柴咲コウにそっくりなんだけど、角度によっては柴崎コウ本人よりももっと小顔でさ。んで、ショートヘアで若くてめっちゃ可愛かった」

「おっばいは？」

「たぶんCカップくらい」

「一見の客か？」

「いや、友達の紹介で占った子。昨日鑑定させてもらったんよ」

「柴咲コウよりも仲間由紀恵の方がタイプだな」

「残念だったな。俺らの由紀恵ちゃんは結婚しちゃったし、ガッキーだってなあ？」

「あーくそ！ なんか世の中のイケメンにムカついてきた。今日は朝まで飲むぞ！」

「明日仕事だろ？ ほどほどにしとけよ」

竹田はビールを一気に飲み干した。マジカルカラー青ゆえ明るくさっぱりとした性質を持っている。

(やれやれまたはじまったか)

アキラは諦めムードを漂わせ、冷蔵庫から追加のビールを取り出した。

「そういえば。明日、バイト来るか？」

竹田はこれでもいちおう建築会社の社長の肩書を持っている。根無し草みたいに生きるアキラを心配してたまに仕事を与えることにしている。

「は？ こんなに飲んでるのに無理に決まってるだろ」

アキラは拒絶した。竹田の仕事は大抵めんどくさい作業だからだ。さほど給料が変わらないならすぐにでもやらせてくれそうな可愛いメンヘラ女が多めの倉庫内軽作業をした方がいいに決まってる。

「いいから来いって。ただぼーとしてるだけでいいから。給料も13Kやるよ」

「一万三千円か……。悪いけど定時には帰るぞ！」

2時間ほどフィリピンパブで飲んだあとにつけ麺エンペラーのタンメンとチャーハンが食える。男心くすぐる絶妙な値段設定だ。元・蒲田中学帰宅部の二人が考えることと言えば、酒、たばこ、女、ギャンブル、バイクにくるま。基本的にはそれしか頭にない。

「んじゃ、明日の6時に迎えに来るから。いつもの公園で待ち合わせな」

「はあ。作業着なんてどこにしまったかな……」

「動きやすい恰好ならばなんでもいいぞ。ただし、長袖な」

「了解。もう帰るのか？」

「だな。あ！」

竹田は何かを思い出したかのようにポケットから袋を取り出した。

「これ。誕生日プレゼントだ」

「まさか。女のパンツとかじゃないよな」

「馬鹿か。そんな上等なもんやるかよ」

アキラはおそろおそろビニール袋の中に手を突っ込んだ。ざらざらとした手触りが伝わってくる。どこかで手にしたことがあるような手触りだった。

「なんだよこれ！ チャイニーズエステの紙パンツじゃねーかよ」

「彼女と一発やる時に必要だべ？」

「彼女じゃねーし、早く帰れよ」

「ガハハ！」

竹田は豪快に笑いながら帰っていった。

3

5時半にかけたアラーム音でアキラは目覚めた。

夢と現実の狭間で揺れ動く心。

昨晚は久しぶりに新城という親友の奥さんが夢に出てきた。新城はアキラを引きこもりから救ってくれた恩人であり、親友であり、共に世界平和を掲げて戦った同志だ。彼の奥さんは地元では美人として名が通っている。

夢の中で新城の奥さんとその妹と一夜を共にした。もっとも身体の関係とかではなく、修学旅行みたいなノリで湖のほとりへキャンプにいき、夜とおしお菓子を食べながら談笑したり、トランプゲームをするといった内容だった。その夢は現実世界では叶わなかった夢だ。

アキラは新城の奥さんの妹に恋をしていたことがある。もし、新城の義理の妹と結婚することができたとしたら、新城とは義理の兄弟になっていた。

『世界一を掲げて戦ってきた俺たちの歴史が三世永遠に栄える様に身を粉にして戦う。その功德として世界一の嫁さんと出逢い結婚したい』アキラはそう強く願っていた。そして、それは新城の義理の妹だと信じていた。

アキラはぼーっと天井を眺めている。もうとっくに夢から覚めているはずなのに、叶わない夢について想像力を働かしている。

(なぜ、俺は新城の義理の妹が運命の人だと勘違いしたのだろうか?)

アキラは現実世界の中で覚めない夢を観ている。それは三世永遠の愛を誓った運命の恋人と出逢い結ばれること。アキラの夢はそれ以上それ以下でもない。

うーんと手を伸ばし背筋をピンとさせて起き上がった。

寝ぼけまなこを手で擦る。「はぁやってらんねえ～」と愚痴りながらスウェットのズボンを脱ぎ作業着ズボンを履く。黒いTシャツの上にブラックダニエルオリジナルのグレー色したジップ付きパーカーを羽織れば一気に戦闘モードになる。

現場仕事にしては遅すぎる目覚めだった。立ち上がり時計をみる。朝飯を食べてタバコを本吸う時間くらいはありそうだった。

サラダチキンと梅干しのおにぎりを食べ終わると他に特別やることもなかった。待機時間は退屈で仕方ないから嫌いだ。窓から外を覗けば天気は良好、雲一つない晴天。アキラはベランダに出てメビウスの10ミリロングに火を付けた。ぶかぶかと風で流れていく煙を目で追いかける。環状八号線と第一京浜が交わる交差点のあたりで酔っ払いが倒れているのが観えた。通行人たちは酔っ払いを避けて歩いていく。スマホをみながら

スタスタと。酔っ払いの事は誰一人として気にもとめていない様子だった。わざとらしく救急車でも呼んであげた方がいい。悪意なくアキラは思った。

アキラは少し早めに外へ出る。歩いて2分ほどで公園にたどり着く。昼間は子供たちや老人の憩いの場となっているので仲良し公園と根付けられて地元民から親しまれている。しかしアキラたちの仲間内では【親不孝公園】で通っている。違法薬物の売買が行われたり売春あっせん人の待機所でもあるからだ。

親不孝公園の脇にはすでに竹田工務店の軽トラックが停まっていた。運転席にいるはずの竹田の姿はない。その代わりに新顔がひとり助手席に座っていた。金色に染め上げた短髪。上下ともに白のとび服を着ている。遠目からでは判断できないが細身でなかなかの美男子にみえた。

末っ子で人の好き嫌いが激しいアキラは気まずそうに公園で待機していた。すると神社の方向からブラウンのとび服を着た体格の良い男が大股で歩いてくるのがみえた。眼鏡をかけていて解らなかったが、あの上腕二頭筋のたくましさをからして竹田に違いないだろう。それに気づいた金髪の男はトラックから降りて男に声をかけた。

「社長！ ご友人の方はまだ来ませんが大丈夫ですか？」

「は？ そこにいるじゃねえか」

竹田が指差す方向にはアキラがいた。金髪の男はアキラのもとへ駆け寄った。

「橋本さんですよ？」

「ああ、はじめまして。アキラでいいよ」

「おれ、岸雷斗っていいます」

「ライト君ね。よろしく。年は幾つなの？」

「30歳です」

「そっかぁ。まだ若いな」

アキラが感慨深く空を仰ぐ。想いでに浸ろうとするアキラを不憫に思った竹田は「アキラ。もう出るぞ」と短くいった。

竹田が運転する青い2トントラックは早朝の環状八号線を道なりに走る。アキラは助手席に座り現場までの道をナビゲーションしていた。ライトはかなり狭い中央座席に腰をかけていて、時折、首を回したり腕を揉みほぐしたりと落ち着かない様子だった。ライトは痺れを切らした。

「社長、タバコ吸っていいですか？」

「ああ。好きにしろ」

アキラはそのやりとりを聞いて窓を全開にした。竹田がコンビニで買ってきてくれたアイスカフェラテを一口飲んでポケットからタバコを取り出した。

「アキラさんはメビウスっすか？」

「そう。ライト君はセッターか」

「はい。セブンスターオンリーです。吸い始めの時から浮気してないです」

「女関係では浮気ばかりなのにな」

竹田がぼそっと呟く。

「浮気なんかしてませんよ。彼女だっていないし……」

「え？ ライト君、彼女いないの？」

「いないっすね。バイクのケツには女乗せてません」

「バイク乗るんだ？ なに乗ってるの？」

「カワサキのニンジャの250です」

ニンジャは最高速165キロ出る。『男カワサキ』と呼ばれるくらいマニアには人気だ。

「なんか音楽でもやってそんな感じだね」

「はい！ ロックバンドやってます」

「そうそうコイツ売れないバンドマンなんだよ。そのせいでよく遅刻してくるんだ。なあアキラ。元宮の繋がりで、音楽関係者紹介できないのか？」

「元宮さんってダブテックの元宮さんっすか？」

「ああ。同じ中学なんだよ。アキラと元宮は幼馴染だ」

「まじっすか？ スゲー！ アキラさん今度紹介してくださいよ！」

「別に構わないけど、忙しいヤツだからなあ。しかも、スマホがぶっ壊れた時にアイツの連絡先も消えてしまった。あんま期待しないで待ってて」

アキラがそう言うときライトは嬉しそうに正面を見つめてカフェラテを飲んだ。

ダブテックとはジャパニーズレゲエユニットのことで、単独で武道館ライブをやれるくらい人気がある。ファーストアルバムの『ダブテック』は280万枚以上のセールスを記録し、彼らの代表曲である『ハイウエイ』は、約20年の歳月を超えてなお若者に支持されている。アキラと元宮は同じマンションに住んでいたことがあり、誕生日も一日違いである。そればかりでなく、出席番号が一つ違いであったり、身長も一センチしか変わらない。そして、同じB型のおとめ座である。しかし、そこまで共通点があるにも関わらず、趣味嗜好は全く異なっていて、性格もだいぶ違う。元宮が目立ちたがり屋なのに対し、アキラは目立つことが大っ嫌いであるし、元宮の趣味がサーフィンとバスケットなのに対して、アキラは泳ぎに全く自信がない。アキラはソフトボールやサッカーなど陸でできるスポーツが得意なのだ。

その違いをアキラが昔から不思議に思っていて、30歳を超えた時に、とある占い師にみて貰ったのだ。アキラが不思議に感じていたことは全て占い結果の中にあった。早熟と大器晩成運の違い、アイドル星と物書きの適正の違いなど、様々な違いがあることが解った。単に西洋占星術の12分類だけでは測れないものを東洋占星術は全て解決してくれた。そればかりでなく、生年月日が同じはずの双子ですら、先に生まれたか後に生まれたかでかなりの違いがでるようだ。アキラは次第に占い師になることに憧れて、パチンコで勝ったお金で琉球占術の初級鑑定師になった。琉球占術とは、東洋占星術、数秘術、古典風水などの中率が高い占術をミックスさせて心理学を取り入れた世界で唯一の占いのことである。ちなみに沖縄が発祥の地だ。沖縄はアキラの母親の故郷である。

竹田から貰ったアルバイトは本当にたいしたことない仕事だった。竹田がドリルでコンクリートをはつり、ライトが袋詰めして台車まで運ぶ。アキラはただ台車に乗せたガラをゴミ捨て場まで運ぶ役割だった。しかし、ライトが袋いっぱいガラを詰めるので、

積み下ろしの時に重くて重くて仕方がなかった。15時休憩の時に喫煙所でライトと二人きりになりLINEを交換した。どうやら蒲田が地元らしい。ひょっとしたら地元の大先輩の息子かもしれないとアキラは思った。今度ライブに来て下さいよと言われたが「行けたらいく」と茶を濁した。現場から竹田の実家へと戻る車中では、疲れ切ったライトがうたた寝をしていた。竹田とアキラは気を使って喋らずにて、しばらくは流れゆく景色を眺めていた。長く暗いトンネルの緩やかなカーブを走っている時、対向車のヘッドライトから放たれたハイビームがアキラの視界に飛び込んできた。眩いばかりの光によって気を取り戻した。

「なあアキラ」

ぐっすりと眠るライトの向こう側から竹田の低い声が聞えた。

「ん？ なんだ？」

「彼女と寄りを戻したらどうだ？」

意外にも竹田は人情家な一面がある。アキラがまだ占い師として食えなかった時代に竹田だけはアキラを見捨てることはしなかった。パワーストーンを買ってくれたりアルバイトをくれたりもした。

「まあ、相手のヴァージンを奪ったのはおれの最大の罪だ」

「ならなおさら罪を償えよ」

「……………」

アキラには竹田の気持ちが痛いほど解る。彼は職業柄女性との接点がほとんどない。ゆえに女性関係に関してはクリーンでいたいという気持ちが強いだろう。一方で、風俗遊びに興じているのは、彼女がいない寂しさが理由だとも思う。

「今更、寄りを戻そうなんて虫が良すぎるよ。それに……………」

アキラはそこまで言うとしばし沈黙した。竹田はアキラが口を開くまで黙っていた。

「詩音には悪いけれど、気になってる人がいるんだ。好きとかいう甘い感情じゃなくて、夫婦みたいな温かさを感じる。詩音のことは忘れられないけど、今の俺にはどちらも選べないよ」

「まあ、俺らみたいなクソな人生からしたら選べるだけまだマシだ」

「そうかな？ 単にふらふらと恋愛遍歴だけを重ねていい年して結婚もできない。竹だったら良いひと現れると思うぞ」

「ま、子供は要らねえから、40歳くらいで中出しし放題だったら最高だな」

「心にもないことを」

アキラは解っている。竹田だって純愛がしたいだけなのだ、と。

アキラと出会った夜、ライトは蒲田の音楽スタジオにいた。蒲田駅東口から徒歩7分に位置する隠れ家的なスタジオだ。バンド練習音楽仲間であり義兄弟の長野信平とジャムセッションをしていた。

「信平！今日はやってらんねぇ！」

ライトは粗暴なまでにエレキギターを放り投げて言い放つ。

「また、かんしゃく起こしたか。アニキ、いい加減大人になれよな」

信平は細い指先で長髪をかき上げた。

「うっせー！もともととは、お前が連れてきたベースのせいじゃねぇかよ！」

「まあ、そういうなって。アニキに女の良さを知ってほしくてわざわざいい女連れてきたんだから。それなのにアニキったら真面目ぶっちゃってさ。まさか30歳にもなってまだ素人童貞なんじゃ？」

「あーむしゃくしゃする。ネパール人でも殴りてえ！」

「ウケる！なんでネパール人限定なんだよ？」

「知らねぇのか？蒲田じゃネパール人半グレ組織が悪さしてやがる」

「妄想、幻覚、幻聴……。ドーパミンの出すぎでいよいよ精神病院行きになるぞ」

「うっせー！ナチュラルハイって言葉を知らねぇのか。俺は酒もドラッグもいらねぇ身分なんだよ」

「アニキ、一つだけいわせてくれ」

「な、なんだよ」

「社長の付き合いでチャイニーズエステ通いもいいけど、そろそろ本気の恋愛をしてくれ。そうでなきゃおれ……………」

「信平。さっきから様子おかしいぞ。どうした？」

「いや、なんでもない。さあ、帰りにラーメンでも食ってふて寝しようぜ！」

ライトと信平はレンタル楽器を受付に返し、スタジオを出た。男同士のバカ話に花を咲かせながらラブホテル街へ歩みを進めていく。するとライトは幼馴染の女性によく似た姿をみかけた。ライトはズカズカと早歩きをして女性の背後までせまる。

「お嬢様はこんなスラム街で何をお探しですか？」

不意を突かれた女性は、びくっとしながら振り返ることもなく駆け足で逃げていった。呆然とするライトに信平が駆け寄って肩を抱いた。

「アニキ、今の誰？」

「お前には関係ねぇ人だよ」

「ふーん。そうは見えなかったけど」

信平にはライトの様子が可笑しかった。まるで小学生くらいの男子が好きな女の子に
対しわざと意地悪しちゃうような感じに見えたからだ。

「それよかラーメン食べにいくべ！」

ライトがからっとして言う。

「あ！ ごめんアニキ。おれ用事思い出した！ 先帰るわ」

そう言って信平は帰っていった。

ライトはバイクの駐車場まで辿りつく。またしても女性の姿をみかけた。時計の針は
深夜一時を指している。過去にライトは女性と面識があった。幼馴染の遠野祈織だ。彼
女の住まいは田園調布であることをライトは知っていた。田園調布のお嬢様がこんな時
間に蒲田にいるなんて不自然だ。

ライトは事件の匂いを感じた。祈織には悪いがこれも幼馴染の縁。尾行して護るしか
ない。ライトはそう決心した。

祈織は京急蒲田駅西口のタクシー乗り場にむかって歩いているとライトは予測してい
た。しかし祈織は周囲をきょろきょろと見渡し、ふいをつくように交差点を左へと曲がっ
た。心なしか急ぎ足のようにも感じた。ますます怪しい。この先には天皇家ゆかりの八
幡神社があり、そのはす向かいにはセブンイレブンがある。なんてことない。地元民な
らば誰もが知っている羽根つき餃子発祥の店ニーハオがある通りだ。その先には朝方に
アキラを待っていた公園がある。まさか。ライトは嫌な予感がしていた。

祈織はセブンイレブンへと入っていった。ライトは持っていたタオルを頭にぐるぐ
ると巻いた。素性を隠すためである。祈織にばれないよう神社側から見張る。すると、今
日一緒に仕事で出逢ったばかりのアキラの姿があった。祈織はアキラの後を追うように
コンビニから出た。二人はライトに全く気付き様子もなく、すぐそばを通りすぎて音
楽スタジオの方面へ歩いていった。この先に営業している店はラブホテルかビジネスホ
テルくらいしかない。

ライトはアキラを刺し殺したいくらいの情動にかられた。疑うことを知らない純粹無
垢な少女のまま大人になった祈織のような女に限って、あんな冴えないジジィと身体
の関係をもつことなんてありえないはずだ。しかし、そう自分に言い聞かせれば言い聞か
すほど、不信任は募っていく。

社長のツテでたまにアルバイトに来て中途半端に現場を残して去っていく。ライトだ
けでなく他の職人もアキラのことを快く思っていなかった。だからみんなでグルになっ
て遠回しにアキラに嫌がらせをする予定だった。「いざとなったらあんなジジィ俺一人で
充分すよ！ 二度とたてつかないように半殺しにしてやりますから」ライトは他の職人た
ちにクダを巻いた。その罪に対する罰がこんなにも早く降りかかるとは夢にも思ってい
なかった。

アキラと祈織はラブホテル【ヴィエラ】へ入っていった。

ライトは呆然と立ち尽くしていた。お月様はそろそろ満月になろうとしている。生ぬ
るい一筋の風が吹きぬけていった。この先に起きるであろう運命の悪戯を告げるかのよ
うに。

「祈織ちゃん気持ちいい？」

「最高に気持ちいいです……」

アキラはベッドにうつぶせになっている祈織の足の裏をやさしくほぐしていく。彼は占い師であると同時にセラピストとしての顔も持つ。若い頃は鍼灸・整骨院に努めていたこともあった。マッサージが上手だと評判の高い院長先生から直々にマッサージを教えて貰った。指圧向きの指をしていると才能を評価されてもいたのだ。若い頃からアキラは立ち仕事が多かったので足腰に疲労がたまりやすかった。そのため、マッサージにはかなり投資してきたのだ。単純に癒しを求めていたこともあるが、マッサージ技術向上のためでもある。そのスキルを鈍らせたくないとの思いから時々、友人や友人の紹介でマッサージをしている。セラピストとしての顔も持っているのだ。

アキラは祈織のふくらはぎから大腿筋をほぐしていく。腰痛の震源地であるお尻のあたりを指圧する。センシティブな部位に触れているにも拘わらず祈織の反応はない。そろそろ眠りへと誘う時がきたようだ。

「祈織ちゃん。時間も時間だし寝ちゃってもいいからね。僕はソファで仮眠取らせて貰えば充分だから」

「はい。お言葉に甘えて。今日は泊まらせて頂きます……」

祈織は照れながらいう。アキラはクライアントの前では私的感情を挟まない。しかし祈織のような美女相手にマッサージしていると興奮してくる。テンションは最高潮に達しようとしていた。

祈織の身体はかなり凝っていた。足裏を触っていた時から硬いという印象を持っていた。特に肩甲骨周りにはパンパンに張っていて看護師という職業の過酷さを知った。

祈織は裸にバスローブを巻いただけの恰好になっている。アキラが持参したルームウェアには着替えなかったのだ。チェックインの際にレンタルしたアロマディフューザーからラベンダーのやさしい香りが漂う。スマホからはリラクゼーションミュージックが流れている。ここは本来、大人と大人が密会し愛を確かめ合う場所。または秘密の恋愛の末、情欲の全てをさらけ出す場所。男性セラピストが女性客に対してリラクゼーションマッサージを提供する場所ではないかもしれない。しかし蒲田では他に適切な場所が見当たらない。ほぼノープランのうちに、ノリと勢いでラブホテルに泊まることになった。二人の間にはやましい気持ちは全くなかったはずだ。

深夜一時過ぎに落ち合ったのは祈織の都合だった。祈織は人がやりたがらない夜勤を率先して引き受けていたらしい。夜勤の調整のため昼間に睡眠をとることも多いようだった。今日は夜勤明けで明日は休みらしい。

看護師といえば、女性の勝ち組の職業だとアキラはそう思っている。女医よりも結婚率が高く収入も夜勤がある分だけ高い。そして何よりも医療従事者は社会的な地位が高い。教師と並んで崇高な職業である。しかも国家資格を持っているので幾らでも潰しが効く。医療系の大学の倍率の高さと頭の良さはお給料にちゃんと反映されているのだ。アキラには到底真似できない生き方である。

「祈織ちゃん、仰向けになって下さい」

「はい」

祈織ははだけたバスローブをなおしながら仰向けになり「これでいいですか？」といった。

「もう少し下に来て。フェイスとヘッドスパをやるから」アキラが指示する。祈織はもぞもぞとミノムシのようにベッドの際まで足を伸ばした。

「んじゃ。フェイスマッサージからやっていくね」

「お願いします」

蒸したタオルでむくみをとってから顔全体に薄くクリームを塗る。やはり顔が小さい。祈織はほのかに笑みを浮かべている。すでに夢心地のようすだった。

「アキラさんはなんで占い師になろうと思ったのですか？」

祈織がささやくようにいった。

「運命の人と出会いたかったからさ」

「運命の人ですね」

「そう」

「それで出逢えたんですか？」

「うーん。出逢えたと思ったら、また別の運命の人が現れたんだよ」

「運命の人って一人じゃないんですか？」

「厳密に言えば一人ではないよ。男同士でもソウルメイトと呼べる関係はある」

「そうなんですね。私はまだソウルメイトと出会えてないかもしれません。アキラさんはたくさん運命の人がいて幸せですね」

「これも仏法が導いてくれたことだよ」

「アキラさんは仏法者なのですね」

「そうだよ。祈織ちゃんはクリスチャンだったね」

「はい。生まれた時からカトリックです」

「僕の誕生日が8月27日なのだけれど、前日の26日はマザーテレサの誕生日だ」

「8月27日はマザーテレサが洗礼を受けた日ですね」

「そうらしいね」

「世界平和を目指してらっしゃるのですか？」

「以前まではそうだった。けれども色々あって。今では自分のためだけに生きることにしたんだ。もちろんできる範囲で社会貢献してくことには変わらないけれど、必要以上のボランティアは要らないんじゃないかなって。そういう風に考えているんだ」

「まあ考え方は人それぞれですものね。私は身寄りのない子供たちをどうしても放っておけないのです。この先もボランティア活動は続けていくつもりです」

「素晴らしいことだね。僕も来世生まれ変わったらクリスチャンになって、祈織ちゃんたちと社会奉仕活動をしたいよ」

「仏法ではできないんですか？」

「やってる人はいると思う。ただ、仏法は勝負を先とするからまずは人生に勝たなきゃいけない。僕はまだまだ社会的な立場は弱い方だから……」

「何か諦められない夢があるのですか？」

「うん。小説家になりたいんだ」

「小説家ですか。素敵な夢ですね。ぜひ叶うようにお祈りします」

「ありがとう」

アキラは祈織の頭部をマッサージする。驚くべきことに、髪の毛の一本一本までキューティクルが整っていた。継続して頭をさする。10分も経たないうちに、さっきまで饒舌だった祈織が寝息を立てはじめた。アキラはそっとベッドから降りる。祈織のお腹から足先にタオルケットをかけた。祈織が完全に深い眠りにつくまでそばにいて髪を撫でていた。アキラは祈織が完全に寝たことを確認してからソファに腰をかけてタバコに火をつけた。

遠目から祈織を見つめる。そういえば沖縄滞在中にもこんな眠れない夜があった。

占術協会の年下の上司と一つ屋根の下で過ごすことになり、無言に耐えきれず、マッサージをしてあげた時のこと。今日みたいに、すやすや眠る美しい女を遠目で見つめながらタバコを吹かし、ギターを手を取った。そして弾き語った。曲目はジャズのスタンダードナンバーの『黒いオルフェ』だった。うまく弾けない黒いオルフェを弾き語っていると、泣きたい気持ちになった。

過去に想いを馳せていたアキラが正気に戻ったのは強い空腹を覚えた時だった。気が付けば時計の針はAM3時を指していた。

祈織と落ち合ったのがだいたい深夜1時をまわっていた頃だから約90分間以上はマッサージしていたことになるだろうか。アキラはスマホを手にした。人気ジャズピアニスト藤原涼子のミックスリストをかけた。こんな夜にはジャズが似合う。

夏の終わりと秋のはじまり。なぜかせつなくて、ほろ苦くて。でも、実り多きこの季節を誰もが好きになる。秋の夜長と妖艶なジャズと少量の酒。このラブホテルのスイートルームにはサウナやキッチンが備え付けられている。3人掛けのソファもある。シティホテルのスイートには泊まらせてあげられないが、せめてもの紹介者の涼子への友愛の証だ。

遠野祈織を紹介してくれた藤原涼子のマジカルカラーは黒。9月20日には39歳になる。涼子は国内最高峰の人気ジャズピアニストだ。涼子とアキラは四柱推命での相性が抜群に良い。丁巳と壬申の相性は干合といって上も下も大吉なのだ。結婚するならばこれ以上ないくらいの好相性である。しかもマヤ暦ではアキラが涼子の運気を上げる役割を担っていることがわかっている。さらに反対K I Nという真反対の性質を持つ相性でもあるのだが、最強の夫婦を目指すならば反対K I Nは必要不可欠なのだ。なぜならば、お互いがないモノを補って生きていくのが夫婦であるからだ。アキラの元カノである星崎詩音との間に亀裂が入ったのも藤原涼子との出会いが原因だった。

2022年8月27日。アキラの42歳の誕生日。最愛の彼女である詩音とデートする約束をしていた。詩音とは銀座で待ち合わせていた。思いついたように詩音が「アキラの生まれ故郷へ行きたい」と言うので仕方なく蒲田を案内することになった。その日事件は起こった。

アキラがシャワーを浴びている間、風俗嬢からLINEメッセージがきたらしい。詩音はすぐさまその名前をスマホで検索した。その女は蒲田では有名なチャイニーズエステ店の人気嬢だった。場合によっては客と身体の関係を持つこともあるらしい。詩音はそのことが許せなかったというよりも、一時的な快楽を発散させるためだけに大金を使うアキラに不信感を抱いた。悲しくてにきそうになった。アキラがシャワーから出ると詩音は真っ先に彼を問い詰めた。そしていっぽう的に、別れ話を切り出して部屋を飛び出していった。それと同じくして。ふたたび困難がアキラの身に降りかかった。幼馴染の元宮勇気が失踪したというのだ。アキラは元宮勇気のママさんから頼まれて行方を捜すことになった。そして、その旅の途中で藤原涼子と出会ったのだ。涼子はアキラの浮気的な一面があることにはいっさい気にしないタイプだった。むしろ彼が女性からモテることに対して【優秀な遺伝子を独り占めしてる】ことに優越感を抱いていた。しかし、涼子とアキラが男女の関係になるのは早すぎた。詩音との曖昧な関係。涼子の甘い誘惑。最終的にアキラはそのどちらも選ばなかった。いや、選べなかった。運命の女性を探す旅はふり出しに戻ったのだ。

アキラはいつの間にかソファで寝ていた。祈織は着替えと化粧をすまし、椅子に座り読書をしていた。白いワンピースに青いカーディガンを羽織っている。その姿はどこに出しても恥ずかしくない立派なお嬢様といった印象だ。

「祈織ちゃんおはよう」

「おはようございます。昨晚はありがとうございました。とっても夢心地でした。ぐっすり寝れて疲れもとれまたした。またお暇な時お願いしても良いですか？」

「喜んでお引き受けするよ」

「これお鑑定料とマッサージ代です」

そう言って祈織は白い封筒をアキラに差し出した。

「涼子さんの紹介だから受け取れないよ」

「そうは言わず、受け取って下さい。こう見えてもお金だけは持ってますから」

「お金持ちのお嬢様には敵わないな。では遠慮なく頂いておくよ」

アキラは白い封筒を受けた。鑑定料とマッサージ代金の相場以上の厚みを感じたが、知らぬふりをした。とにかく金持ちがお金を払うというときには、恥をかかせてはいけない。これは彼が日頃から金持ち相手にパワーストーンを販売している経験に基づく実感だ。

「アキラさんは今日、お忙しいですか？」

「いや、究極のフリーランスだから、忙しくはないな」

「そうですか。それならお食事でもどうですか？」

「そういえば、お腹すきましたよね。行きましょう。その前にシャワー浴びさせて下さい」

アキラがシャワーを浴びている間も、祈織はずっと読書をしていた。アキラの髪は前髪が目にかかるくらいのウルフヘアなので、シャワーを浴びる時間は短い。髪の毛を乾かす時間を含めても、20分もかからない。それにも関わらず、祈織は一冊の文庫本を読み終わろうとしていた。

「祈織ちゃんお待ち。準備できてる？」

「はい。いつでも大丈夫です」

二人はホテルの最上階の廊下を歩いていく。

すると、エレベーターの前で中高年のカップルが激しいキスをしている最中だった。アキラは祈織の腕を引き、非常階段へと誘導した。

「はぁ、全く朝っぱらから見せつけてくれるぜ」

アキラは皮肉交じりに言う。祈織はくすくす笑って

「私たちもしますか？」

と言い、アキラの手を握り締め、唇を突き出し瞳を閉じた。

アキラは不意を突かれた。まじかで見ると、そこら辺の女優なんかよりもよっぽど可愛い顔をしている。唇にキスをしかけたアキラだったが、祈織の前髪をかき上げおでこに優しいキスをした。

「アキラさん、ありがとうございます」

祈織はなぜだかありがとうと言った。アキラにはその意味が解らずに、優しく抱き寄せて「もし来世があったとしたらその時こそ、神の下でキスしようね」と言った。

祈織の手を引いて非常階段を下りていく。爽やかな夏の朝焼けが二人を照らしていた。このままこの美しい娘を奪いされたら。アキラは詩音や涼子とはまたちがった意味で運命を感じていた。祈織は草花のように可憐で素朴で美しい。何度も踏まれても、大地から強く咲く野花のようだ。そのしなやかさ、温かさ、その全てを奪いたい。アキラは初恋の時の思い出して、祈織にばれぬよう、前髪を手でくしゃくしゃにした。

ホテルの裏口から出る。酔っ払いが一人寝ていた。見覚えのある顔だった。

「ライト？」

祈織はライトの事を知っているようだった。祈織はライトに駆け寄って介抱をする。ライトは祈織に気づき「浮気娘に用はねえよ！」と突っぱねた。ライトはよろよろと立ち上がり、こちらに来た。

「てめえ、社長のダチだからって、人の女に手えだしてタダで済むと思うなよ」

「やめて、ライト！ それにいつから私があなたの女になったのよ」

アキラは無言で突っ立っていた。まるで酔っぱらった時の自分そっくりだったからだ。ライトは祈織の方を向き

「あの時誓ったじゃねえか。将来結婚しようねって」と言った。

「そんな子供の頃の話じゃない。馬鹿じゃないの？」

「…………お前にその気がねえなら、お前を殺して俺も死ぬ」

「殺したいなら殺せばいいわ。どうせそんな甲斐性もないくせに」

「うっせー！」

逆上したライトは酒ビンを手にして祈織の頭を勝ち割ろうとした。アキラはとっさに手を出して制した。

「待てよ。蒲田の大先輩の息子だろうが、女に手え出す奴はゆるさねえ」

アキラはライトの腹に横蹴りを入れた。その蹴りは酔っぱらったライトにとって非常に重いものであった。ライトは簡単に気をうしなった。

「祈織ちゃん、救急車呼んであげて。それで俺たちも逃げよう」

「大丈夫ですかね？」

「殺しても死なねえヤツだよ。こんなくらいで泣いちゃうくらいなら、蒲田に住む資格ないね」

祈織は救急車を呼んだ。そして、ライトの財布を取り出して、3万円を入れておいてあげることにした。3万円もあれば、救急車代や病院代を払っても今日一日を過ごせるくらいは残るはず。でも、どうしてこんなことになるのだろうか？ 祈織には蒲田の朝焼けが眩しすぎて忘れられないものとなった。

二人はタクシーを利用して横浜中華街まで逃げてきた。アキラが若い頃に勤めていた山下公園近くにあるローズホテルで朝食をとることにした。

「アキラさん、本当に良かったのですかね？」

「ああ。大丈夫だよ。それよりもライト君と祈織ちゃんが知り合いだったことにびっくりしてるよ」

「それは私もです。ライトとどこで出逢ったのですか？」

「ん？ 地元のツレが建築の仕事やっててね。そこの若いのだよ」

「そうだったんですね。ライトがご迷惑おかけしました」

「いや、そんなの祈織ちゃんを鑑定した時から解っていたことだから」

「そうなんですか？」

「はじめに言ったじゃない。占術は科学だって」

「確かに。性格も運勢も当たりすぎて怖いくらいです」

アキラは中華粥をすする。それに合わせて祈織はスプーンでスクランブルエッグをすくう。戦士たちのつかの間の休息だ。

「わたしたち歳ははなれてるけど幼馴染なんです」

「そうだったんだね」

「ライトは小さい頃、田園調布に住んでたんです」

「へえ、蒲田が地元って聞いてたけど、出身は田園調布か」

「はい。彼は中学生の時に蒲田へ引っ越していきました。どうやらお父様の事業がうまくいかなかったみたいなのです」

「そっか。まあ蒲田だって金持ちと貧乏人の差が激しい街だ。最近では蒲田の新築マンションなんか高すぎて、普通のサラリーマンじゃ買えないよ。貧富の差は激しいけど色んな人間がいるから夢追い人に優しい街ではあるよ」

「ライトってロックバンドやってるんです。彼はギターを弾きながら歌うんですけど、なかなか良いメンバーと巡り会えなくて苦労してるみたいです」

「まあ、この世界はなにが起きるか解らないからねえ。夢みたい気持ちも解らなくもない。けど音楽の世界は若くしてはっきり結果出ちゃう世界だからねえ。このまま趣味として続けるには良いと思う」

「私もそう思います。稀に遅咲きの音楽家ってみかけます。彼らは若い頃には日の目が当たらなかっただけです。ライトたちがやっていることは遊びにしかみえません」

「野球で例えるならば草野球だよな。利害がないから楽しいかもしれない。けど音楽だけで飯を食っているプロとの差は大きい」

「彼はどんな職業に就けばうまくいくのですか？」

「彼の生年月日解りますか？」

「7月26日生まれです。年は私と3つ違いだから1993年生まれになります」

「解りました。詳しいことは琉球占術でみないと解りませんが、四柱推命と宿曜占星術で占ってみましょう。鑑定書を出すのでちょっとお待ちくださいね」

岸雷斗(キシライト) 1993年7月26日生まれ。月星座・「亢宿」日干支・「戊申」通変星・「敗財」20代から40歳までのエネルギー「衰」

(なるほど！)

アキラは四柱推命の専門ではないが、すぐに腑に落ちた。ついでに遠野祈織の命式も出した。ライトと祈織の相性を調べておかねばならない。

遠野祈織(トオノイノリ) 1996年7月7日生まれ。月星座・「奎宿」日干支・「乙巳」通変星・「食神」20代から40歳までのエネルギー「養」

(…………。これは！)

アキラは祈織の命式をみて意表を突かれた。琉球占術だけでは読み取れなかった答えがでた。

「まず、ライト君は見た目からしてイケメンですよ。占術上でもイケメンで人気運が強い。インディーズとはいえ、やはりバンドマンはモテます。なぜロックなのかというと、この方は反骨精神が強いのです。そのことは、月星座につよく出ています。かなりのスタイリストで美に纏わる神様に守られています。ですので、ファッションや美にまつわる仕事が向いています。礼儀正しさも持ち合わせていますので、どこことなく品があり、大器晩成運を持っています。年を重ねることに光ります。しかし静かなるときは柔和な彼でもひとたび爆発すると一筋縄ではいきません…………」

そこまでアキラが言うと、祈織は身震いした。先ほどの出来事が脳内に蘇ったのだ。

「温かい飲み物でも持ってきます」

アキラは席を立つ。祈織はすこし震えていた。後悔の念がアキラの脳内をよぎる。クライアントを不安にさせてしまうことはダメな鑑定師の典型的パターンだ。

それでも、良いことばかりは言っていられない。場合によっては祈織の生命の危険すらあるのだ。現にライトは逆上して、酒ビンで祈織の頭を殴ろうとした。今となっては、占いは後付けのような話である。この先、何が起きようとしているのか。それを防ぐにはどうしたらよいのか。これを考えるのが占術師の仕事だ。

朝食ビュッフェのトレイを取り、ケーキコーナーへと向かった。奇跡的に苺のショートケーキが2つ残っている。アキラがこのホテルで働いていた時は、真っ先に苺のショートケーキがなくなり、お客様の方から聞かれることも多かった。

迷わず、苺のショートケーキを皿に取り、ついでにチョコレートケーキとモンブランをセレクトした。バーカウンターには、焼き立てのパンやサラダ、スクランブルエッグやウインナーといった軽食からサバの塩焼きとごはん味噌汁みそ汁の和食まで色とりどり

に置かれている。

レストラン内にはリラクゼーションミュージックが流れていて、観光客たちは様々な服装をしており、異国情緒あふれる中華街の素晴らしい朝を演出していた。ホットドリンクコーナーは、ガラス製のティポッドにコーヒーとお茶が温められている。脇には、コンスープと野菜スープもある。アキラは一日に4リットル以上水分をとるので、水なしには生きていけない。二人分のコーヒーと野菜スープをカップに注ぎ、念のため、紅茶を一つとフレッシュミルクもキープした。

窓際の席へと戻る間、遠目から祈織の様子を伺うと、すっかり落ち着いた様子で食事をとっていた。けれども、何か考え事をしているようにも見えた。

4人掛けのテーブルにトレイを置く。アキラはふうと一息ついて

「何を考えていたの？」と祈織に尋ねる。

「ライトが言ってた言葉の意味を考えてました」

「ひょっとして、俺の女にとって言葉？」

「よく解りましたね。さすが占術師」

「一方的な想いですよね」

「そうなんです。それに、ライトとは昔からの付き合いですけど、今回はじめて彼の気持ちみたいなものを知り、ちょっとショックです。小さな頃から遊んできたのに、そんな風に女として見られていたなんて……」

「ライト君には悪いけれど、彼と祈織さんは宿曜占術でみると安壊（あんかい）という最悪の相性です」

「あんかい？」

「ええ、壊し壊される関係性のことです。祈織さんはライト君によって壊されるのです。だから、一刻も早く離れた方が良い」

「離れるもなにもライトとはたまに電話で話すくらいで会ってませんでしたし、男女の関係でもありません。縁を切れ、ということですか？」

「こんなの占術師としては言いたくないのですが、占い上の話がリアルでも起こり始めている。最初に祈織さんを鑑定した時に言いましたよね。このままだと死者もでるかもしれないって。その可能性は極めて高いです。縁をきれと言っても、僕と一緒にいたら、必ずまたライト君は復讐にくるでしょう。だから……」

「先生、まさか……」

「僕と祈織さんが会うのもこれで最後にしましょう」

「そんなの嫌です！ アキラ先生とは末永くお付き合いしていきたいです。先生だって言ってたじゃないですか。関わったクライアントとは生涯のお付き合いをするつもりで鑑定するって」

「僕が殺される分にはまだ責任持てます。もっとも、殺されるような生き方はしていないし、復讐といってもたかが知れてます。ライト君は正直言って、あまり頭がよくないですから。刑務所にでも入って更生してもらうしかない。でも、祈織さんが巻き込まれるとしたら話は別です。僕は涼子さんの大切なご友人に手を出す人間は許さない。今度は僕がライト君を社会的に抹殺する番です」

アキラは飄々とはなす。祈織は頑ななまでに眉間にしわをよせて「嫌だ」と言う。

安壊とは、燃えるような激しい一目惚れからはじまる恋愛や浮気や不倫の関係性にも多い。しかし、その末路は憎しみあって何もかも壊れて別れるという悲恋に終わる。ぱっと見は刺激的で良いのかもしれないが、そんな愛は幻想だ。しかも、安壊の相手とは一緒にいるだけなのに運を下げると占いの教科書に書いてある。本来、一子相伝で継承されてきた宿曜占星術は、あまりの的中率の高さから平安時代には、権力者だけの特権として庶民からはく奪された歴史がある。しかし、四柱推命と合わせてライトと祈織の相性を調べても、やはり事件に発展するような運勢なのだ。

「先生はひどい人ですね」

祈織は怒りのこもった口調でいう。美しい顔が台無しだ。

「祈織ちゃん、これが一番良い方法なんだよ。僕はライト君の復讐を受けて立つ。解決した時には、また祈織ちゃんと会えばよい。それまでは、無視を決め込むのが手っ取り早い。僕はライトを蒲田から追放する。それでいいじゃないか」

「そんなの不安で不安で仕方ありません。だってわたし、うち所が悪かったら本当に生きて帰れなかったかもしれないですよ」

「……その件は本当に申し訳ない。ほんの少しの金額をケチって、ラブホテルなんかを選んだから、ライト君だって勘違いしちゃったんだ」

「お願いします。アキラさんが私を守って下さい」

「そんなことしたら祈織さんのお仕事に響くのでは……」

「仕事なんか別にどうでもいいんです。今の職を辞めても国家資格持ってますので、いくらでも再就職先ありますから。それに、訪問看護をやりたいんです」

「訪問看護も楽なお仕事じゃないですけど、夜勤がない分だけまだ良いですね」

「アキラ先生、どんな報酬でも致します。どうか私を守って下さい」

「解りました。命をかけて祈織さんをお守りします」

その誓いは一生を左右するものとなるだろう。アキラは身が引き締まる思いでいた。無邪気にコーヒーを飲んで笑みを浮かべている祈織は、とても幸福そうに窓の外を眺めていた。

祈織はローズホテルに部屋を取った。

職場には退職する前に有給休暇を消費するため、長期の休みを申請し、実家には涼子と旅に出るとだけ伝えたようだ。コンビニでお菓子や非常食、飲み物を買ひ、部屋に戻った。このまま籠城作戦にしようというのだ。

アキラは、スマホに送られてくる無料メール鑑定をこなしていた。これは彼の主な仕事で、無料から有料サービスへと繋げる重要な仕事なのだ。まずメールには、鑑定に必要な、氏名、生年月日、血液型、出生順、出生地が書かれていて、相談内容にも目を通す。その鑑定情報を沖縄の本店へと送り、鑑定書が送られてくるのを待つ。だいたい早い時で、10分、遅くても20分以内に依頼した順から鑑定書が送られてくる。PDF形式で送られてくる鑑定書と相談内容を照らし合わせながら、メールで文書を作っていく。最後には有料サービスへと誘導するURLを張り付けて、顧客からの連絡を待つ。

全てのメール鑑定を終えると、後は本店に丸投げである。本来、アキラのような個人事業主は、占術協会と業務提携を結び、組織が作り上げたシステムの中で、インセンティブを稼ぐというやり方と、集客から自分ひとりでやる方法の2通りしかない。しかし、アキラは協会専属の占い師ということで、組織の力を借りながらメール鑑定をこなし固定給をもらい、なおかつ個人でも顧客を抱えている。その顧客の大半は、一般人が想像もつかないほどのお金持ちである。

アキラはさっきコンビニで買ってきたスマホの充電器をコンセントに差した。レンタル式モバイルバッテリーの利用も検討したが、さすがに長期戦となりそうな予感がしていたので、約3000円を出してアップル純正の充電器を買ったのだ。ちなみに、レンタル式モバイルバッテリーの社長、ステファン・チェンとは旧知の仲だ。アキラを引きこもりから救ってくれた新城はステファンの会社で働いている。元宮も含めて、蒲田の元宮世代と言われることがあるが、それは単に1980年生まれの仲間たちの中で、いちばん広く有名なのが元宮だからだろう。しかし、人生は50歳を過ぎてからじゃないと解らないことも多い。たった43年の人生の中で、たまたま元宮だけが若くして有名になったのは周知の事実だが、アキラや新城だってまだまだ億万長者になるチャンスはいくらでも訪れる。新城は奥さん方の両親と一緒に暮らしているのだが、その義理の父親が化粧品会社の社長なのだ。ゆえに、新城だって社長になる器はできているし、晩年は遺産相続で豊かな暮らしが保証されていることだろう。アキラだって、母親が資産家の娘なのだから、一般文芸の世界で世界に羽ばたく可能性だってある。その夢が現実になるとするならば、いちばん大成功する可能性を秘めているのは、アキラかもしれないのだ。

王朝を意味するローズホテルのダイナスイートルームは、他の部屋とは差別化されたチャイニーズモダンなつくりになっている。ベッドが3台と4人掛けのソファがL字

に配置されていて、マンションで例えるならば、2DKの部屋をワンルームにしたくらいの広さと優雅さがある。当然、バスとトイレは別だし、化粧台も3台あり、65インチフラットスクリーンのテレビで映画を観ることもできる。ケチなアキラにとって、ダイナスイートルームの連泊は避けたかったが、祈織はどこ吹く風といった具合でお金のことには一切関心がない様子だった。大財閥の一人娘・星崎詩音、国内最高峰のジャズピアニスト藤原涼子、そして、田園調布住まいの遠野祈織、こんなにもお嬢様たちから愛されている自分は、天性のヒモ男であると、アキラは自身の幸運を素直に喜べないでいた。もっとも、彼だって母親が沖縄の財閥の娘であるから、一般人よりはリッチだ。

アキラはメール鑑定を終えてソファでくつろいでいる祈織の隣に座った。祈織はポップコーン片手に映画を観ている最中だった。その瞳は少し潤んでいて、大切な人との別れのシーンに差し掛かっているようだ。アキラはこの映画を観たことはないが、たぶんこの後、主人公は死ぬ。小説を書いていると先の展開が読めてしまって感情移入できない。そっと祈織の傍にいて、ボディーガードのような役割をしている自分の運命はどうだろうか。ここはハリウッドではない、横浜だ。ふと祈織の髪の毛からいい香りが漂ってきた。そのお洒落な匂いにつられて甘い大人な時間を想像してみる。人生は喜劇であるべきだ。全ては神々の演劇なのだから。

どこからかさざ波の音がする。揺れては返すその波動に身をゆだねる様に、恋人たちは真夜中の山下公園で逢引を楽しむ。暗がりの芝生で、または公園内のベンチで愛を語らう。着の身着のまま出てきた二人に行先などない。

アキラはそっとサマーカーディガンを祈織にかけてあげた。

「ありがとうございます」

「いえ、冷えは美容の大敵ですから」

「観覧車、奇麗ですね」

桜木町方面に見える観覧車を指さして祈織が言う。時計の針は20時をまわったばかりだ。インターコンチネンタルホテルや横浜ロイヤルパークホテルの客室の灯りがまるでキャンドルのようにゆらゆらと煌めいている。8月29日、満月タイム。

宝石箱をひっくり返したような水面の輝き。潮風が吹くと恋人たちは肌と肌を寄せ合う。16歳差もあるアキラと祈織の二人ですら周囲からは恋人同士と見られていることだろう。秋風の吹く頃、ふたりの運命はどこで終着駅を迎えるのだろうか。

「アキラさん。私たち恋人同士みたいですよね」

「そうかな？ 16歳も年が離れているし、兄妹って感じじゃないかな」

悪びれもなくアキラが言う。

「そんなことないですよ。絶対恋人同士に見られてます！」

ブンブンと頬を紅潮させ祈織は言う。アキラは知らぬふりをしながら

「そういえば、今日はローズホテルでジャズライブがあるみたいですよ」

思い出したかのように言った。

「ジャズいいですね！ ぜひ、聴きに行きましょうよ」

「朝、食事したレストランで演奏するらしいので行ってみましょうね」

ローズホテル内ブラスリーミリーラフォーレの特設ステージにて、ジャズのライブはすでに始まっていた。このレストランはアキラの思い出の地である。はじめてお付き合いした彼女と出会った場所だからだ。アキラはホール、彼女は調理場で働く職場恋愛だった。

「アキラさん。あれ涼子さんじゃないですかね？」

「え？ 本当だ」

藤原涼子は黒ベースで花柄のチャイナドレスに身を纏い、銀色のピンヒールを履いている。遠目からでもかなりの巨乳であることが解る。むしろ見てくれと言わんばかりに

胸元は空いている。ピアノから放たれる旋律はどこかで聞いたことがある懐かしい曲だった。

「SAKURA……」

「アキラさんこの曲知ってるんですか？」

「ええ、去年はじめて涼子さんのライブに行った時、ラストに弾いていた曲です。どうやら、大切な友人のために作ったと言ってましたが、たぶん……」

そこまでいうとアキラは去年の出来事を思い出した。アキラの幼馴染で親友の元宮が失踪した。そんな噂がネットで飛び交う中、彼のお母さまから失踪したのは事実だと知らされた。そして、元宮を探す旅に出る途中で涼子に出会った。

「涼子さんって本当に華がありますよね」

祈織の声でアキラは現実に戻される。

「ええ。ホントですね」

涼子の演奏は鍵盤を縦横無尽に遊び尽くす。セブンスコードから転調して、サビへと差しかかっていく。天高く舞うそのSAKURAは、光となり祈りとなっていく。大気圏を突き破り、億光年先の星々へ語りかけるが如く舞い踊る。

涼子が立て巻きにした長い髪の毛を振り乱して観客を誘惑する。その刹那、アキラと涼子の視線が合う。涼子は一瞬だけニヤけて再びアキラをみた。その眼差しはとても気高く優美なまでに風雅である。どこまでも無限に続いていく魂のリフレイン。このブルーライトの中で躍動していく。

アキラはこの曲が、今は亡き親友のために作られたであろうことを知っていた。元宮の彼女だった片瀬恭子。彼女は癌のため38歳で亡くなっている。あまりにも短すぎる生涯だった。恭子と涼子は同じ年の幼馴染であった。祈織とライトと同様にして、宿曜占星術でみると安壊という最悪の相性だった。涼子は元宮に想いを寄せているのかもしれないと思っていた。だが、元宮は恭子を生涯のパートナーと言っている。アキラは涼子に惹かれつつある。この三角関係に割って入ってくるのが、詩音と祈織だ。

この曲を聴いていると、ダンスでも踊りたい気分になってくる。SAKURの演奏は観客の心を鷲掴みにした。涼子の演奏は続いていく。

「祈織ちゃん、ごめん。ちょっと席を外すよ」

そう言ってアキラはホテルのロビーを抜けて、2階へと続く階段を上っていった。ローズホテル内の2階には喫煙所がある。たまに調理服を着た従業員の姿を見かけるが、ここが従業員用の喫煙所とは考えにくい。まあ中華街だし、ちょっとしたことは無礼講といった感じだ。宴会や婚礼などのお客さんがちらほら見受けられる。

タバコに火をつけて一息つくと、ぼーっとしながら過去の記憶に想いを馳せる時間だ。アキラはゆっくりと瞳を閉じる。

最愛の彼女だった詩音との別れ。

いつからだろう、こんなにも愛していたのに、二人の距離は離れていく一方。ハワイで過ごしたラグジュアリーなひと時、二人がはじめて身体を重ねた沖縄での特別な時間。その全てが、今はむかし、まるでおとぎ話のような古の物語にも感じる。追いかけられれば追いかけられるほどに、この心は新たな出会いを求めて彷徨う。今はただ切なくて、言葉にならなくて。

アキラがタバコを吸っている間に、涼子のライブは終わりを告げようとしていた。アキラが喫煙所を出ると、タバコを吸うお客さんで順番待ちができていた。たぶん一階から流れてきたのだろう。ゆっくりと階段を下りていく。ブルーライトに照らされていたステージは、オレンジ色へと変わり、さっきまでは見えなかった人の姿が見て取れるようになっていた。

涼子と祈織がピアノの傍で立ち話しをしている。アキラは迷ったが、涼子へ挨拶しにくことにした。

「涼子さん。お久しぶりです」

アキラが言う。すると涼子はケラケラ笑いながら

「アキラ、水くさいわ。この前ベッドを共にしたばかりの仲じゃない」

といって祈織をけん制した。祈織は戸惑いを隠せなかった。

「そうでしたね。それよりも、今日のSAKURA最高でした」

「もう一周忌ですしね」

「やはり恭子さんに向けて書いた曲なのですね」

アキラがそこまでいうと、祈織が口を開いた。

「あのお。積もる話もあると思いますので、私、先に部屋に帰ってます」

その発言を受けて涼子の顔色が曇った。

「部屋？ 祈織ちゃんアキラと同じ部屋に泊まってるの？」

「………はい。でも、違うんです。蒲田で事件に巻き込まれちゃって、それで無理言っ
てボディガードをお願いしてるんです。やましいことは何一つありません」

そう言って祈織はそそくさと逃げる様にその場を立ち去った。涼子はその後ろ姿を見送ってからアキラに尋ねる。

「アキラ、また事件に巻き込まれているの？」

「いや、たいしたことではないよ。そんなことよりも、恭子さんのこと、今でも？」

「恭子は私たちの心の中で生きているわ。来世があるとしたら、今度もまた親友として生まれてきたい。ねえ、人は死んだらどこに行くのかしら？」

「生まれ変わるまで、天国にいるんじゃないですかね」

「そうね。アキラ、立ち話もなんだからバーにでもいきましょ。それに、早く移動しないと詩音が来てるわよ」

「詩音が？」

「ええ、今日は遅くなったからこのホテルに泊まると言っていたわ。アキラがいるならば私もそうしようかしら」

アキラは青ざめた。涼子を追うと言うことは詩音や祈織もセットなのだ。これで何回目の多重恋愛になるだろうか。恋多き人生とは多難であることをアキラは知っている。

「では、僕たちの部屋に泊まったらどうですか？ ベッドも3台ありますし」

「アキラってホント鈍感よね」

「え？ 何か失礼なこと言いました？」

「なんでもない。今日はこのホテル泊まるから部屋に遊びに来て。祈織ちゃんのお世話も大変だろうけれど、大人の時間も必要よ」

涼子はアキラの耳元で「後で部屋番号をLINEする」と囁くように言った。この甘

い誘惑になすすべもなく、今日まで涼子の罠に堕ちてきた。セックスからはじまる恋愛がこれほどまでに長引くとはアキラも思ってはなかった。

10

8月31日、PM6時過ぎ、ライトは蒲田本町にあるボロアパートの2階の部屋で激しく後悔の念に駆られていた。今日は信平を呼び出している。6畳一間の部屋には風呂はおろかトイレすら付いていない。ちょっとだけ大きな収納棚には無造作に衣服を置いて、下の段には音楽CDと漫画がある。後はギターと布団だけしかない。喉が渴いたら自動販売機かコンビニへいく。腹が減ったらラーメン屋か定食屋へいく。そんな野性の本能を目覚めさせてくれる部屋なのだ。幸いなことに、ロックボーカリストがはじめて住む部屋としては最高の場所だ。

ライトは信平との約束の時間に合わせて缶コーヒーを買いに行くことにした。この近所は平地で一軒家が多く、夜はとても静かだが、まれに蒲田駅から酔っ払いが流れてきて騒ぎを起こすこともある。少し歩けば一通りの物は揃うので蒲田から出る機会も少ない。しかし、本来ならば蒲田に住むメリットはその交通の便の良さなのだ。

狭いバス通りを歩くと交差点の信号の傍にセブンイレブンがある。ここのセブンの店長はライトの中学校の先輩である。ライトにバイクの乗り方やタバコを教えたのもコンビニの店長だ。

ライトがコンビニへ入ると店内は恐ろしいまでにガラガラだった。入店時に独特のチャイムが乗り響くと、奥の事務所から店長が出てくる。

「おおライト、仕事さぼりか？」

店長の塩谷雄二がレジ越しに言う。休憩中にタバコでも吸ったのだろう。少し臭う。

「さぼりじゃないっすよ、雄二さん。蒲田で朝まで飲んでたら、変な奴に絡まれて。いきなり蹴り食らって。気づいたら病院運ばれてました……」

ライトは拗ねて言う。

「へえ～。今時の蒲田にそんな骨のある奴がいたなんてな」

雄二は豪快に笑う。

「笑いごとじゃないっすよ。うちの社長の友達なんですよ、そいつ」

「竹田工務店の？」

「そうっす」

「お前知らなかったの？ 竹田ん家って3世代前まではヤクザだよ？」

「え？ そうなんですか？」

「足洗ったとはいえ、元ヤクザの家系の男は只者じゃねえべ。夢潰すわけじゃないけど、ダブテックの元宮だってそうだよ」

「なんかおじいちゃんがヤクザだったとか」

「まあ、元宮の場合、音楽で成功してるからいいけど、ヤクザか大統領のどちらに転んでもおかしくない奴だったよ」

「ヤクザか大統領。やっぱり、てっぺん取るにはそれくらいの強いDNAがないとダメっすかね？」

「当たり前だろ。昭和の時代までは世襲制だぞ？ 職業選択の自由なんかなかったんだからなあ。まあ、例えば親が大工としての才能あるならば、子供だってそれを引き継いで生まれるのさ」

「スポーツ選手の親同士が結婚してもっと強いスポーツ選手を作るみたいな話ですか？」

「よく解ってきたじゃん。一般のサラリーマンの家系から、いきなり大スターは生まれってこと。そういうのは、何世代も種を配合させてようやく誕生するんだよ」

「競馬みたいなはなしっすね」

「競馬を馬鹿にすんなよ。もとを正せば人間だって、たった数パターンの組み合わせから生まれたんだからな。人類、皆、兄弟だよ」

「まあ、そうっすね」

「んで、お前に蹴りくらわした奴って地元なの？」

「みたいっすね。俺は全然知らなかったけど、現場やった時に蒲田に住んでるっていつてました」

「まさか、あいつじゃねえかな」

「アイツ？」

「アキラ……………確か、橋本アキラ」

「え？ 知ってるんすか？」

「そか、やっぱりアイツか。この辺りじゃ有名だよ」

「そんなに悪いヤツなんですか？」

「いや、悪いってよりも、なんか占いとか小説書いてたり。とにかく陰キャな奴なんだよ。でも、蒲田の女どもには格好の話のネタみたいになっててさ」

「女ってワイドショーとか好きっすもんね」

「そうそう。んで、アキラとかいう奴、俺はあまり好きじゃねえけど、アイツには手え出さない方がいいぞ」

「手え出すもなにも、社長の友達っすから。こっちが怖いっすよ」

「あいつ、卑怯だから女に守ってもらってやがる。アイツ最近までこの辺りに住んでたけど、昼間から女の喘ぎ声が聞こえてくるしよ。アパートだよ？ ラブホ行けてんだよな」

「女的に回すと怖いっすもんね」

「すぐに噂が広まって誰も相手にしてくれなくなるぞ」

「こええ。こええ」

そう言ってライトは冷たい缶コーヒーを手に取りレジに置いた。

「タバコは？」

気づいたように雄二が言う。

「あ、いつもので」

こちらから言う前に雄二はセッターに手を伸ばそうとしていた。ライトは現金で会計を済ませると、雄二に小銭を差し出して「情報料っす。コーヒーでも飲んでください」と言って店を出た。

11

「アニキ、調子はどうだい？」

「まだ横っ腹が痛むのとムカムカするな」

「まさか復讐するとかやめとけよ」

「解ってるって。どいつもこいつもうるせえな。そこまで馬鹿じゃねえよ」

「まあ、これでも食って元気だせって」

そう言って信平は買ってきたばかりの牛丼をライトに渡す。

「なんだよ。見舞いって言ったらフルーツとかそういうのだろ。飯は外で食おうと思ってたのに」

「いいじゃんかよ。牛丼は俺たち社会不適合者のソウルフードだ」

信平は牛丼の蓋を開けて七味唐辛子をふった。その匂いにつられて、ふてくされながらライトも牛丼を手にとった。

「アニキ、二人で食うと美味しいな」

「俺は女と二人で飯食いてえけどな」

「あれ、どうした？好きな女でもできたか？」

「お前には関係ないだろ」

ライトは牛丼をかつこむふりして顔を見られぬよう器で隠した。それを見て信平はニヤニヤしている。意外に嘘はつけない男だ。

牛丼を食べ終わると、音楽を聴きながらまったりしていた。ライトはふと思い出したかのようにスマホを手に取りグーグルで『橋本アキラ』を検索した。

『橋本アキラ』1980年8月27日生まれ・満43歳・東京都大田区出身・琉球鑑定師兼小説家・代表作には、占術と共に去りぬ・引きこもりのすゝめなどがある。

ライトは引きこもりのすゝめを読むことにした。そこにはアキラの生い立ちが書かれていた。

アキラは3人兄弟で6歳上の兄と3歳上の姉がいる。幼少期は女の子に見間違われるほど華奢でシャイな性格をしていた。少年期は無口ながらもスポーツマンで人気者として過ごした記憶が綴られている。中学に上がるとアキラは貧血になり、大好きな体育の授業や部活も休まざるを得ない状況になった。中二はファッションや音楽に興味を持ち、隣のクラス的女子から好意を寄せられて告白されかけたが、恋愛よりも友情を選んだ。そして、アキラが引きこもるようになったきっかけが、中学三年生のイジメである。アキラはギャル風的女子グループから精神的なイジメを受け続けてノイローゼになった。紆余曲折あったものの、完全に家に引きこもるようになったのはアキラが18歳になってからのこと。外にでるだけでも、激しい動悸に襲われて倒れそうになる。それが病気だ

と知るまでに、彼は自問自答を繰り返す。幸せな人生とは？ どこにいけば笑顔でくらすのか？ または、世界の全ての人たちが平穏無事にくらすには何をすべきか？ 2年間思索にふけた後、とある男と再会を果たす。新城隆則、小学校からの同級生だ。彼は家にこもりがちなアキラをギター練習という口実をつくって外に引っ張り出しては、どうにかアキラが社会復帰できる方法を計画していた。そこで思い立ったのが、仏法を縁としてお世話になっている先輩たちに間に入ってもらうこと。対話することで本来の姿に立ち返ってくれるだろうという確信が新城にはあった。アキラはそんな新城の真心に感動し、生涯二人三脚で生きていくことを決意した。そして、仏法に帰依して本来の輝きを取り戻していったのである。

ライトは引きこもりのすゝめを読んで、悔しいが、心に熱くなる何かを感じた。ライト自身、不正や悪が大っ嫌いである。権力の魔性に憑りつかれた悪魔の陰謀を暴きたくてロックを歌っている。アキラが正戦士だとするならば、ライトは裏社会の正義だ。

「信平、ちょっとカラオケ付き合えよ」

「え？ まだ体の調子万全じゃないんだろ？」

「いいから付き合えって」

ライトはスウェットのズボンを脱ぎ、ジーパンを履く。

「おいおい、まだ木曜日だぞ？ 俺はいいけど、兄貴は土曜日も仕事じゃん」

「いいんだよ。あんな会社。少し休んだくらいでガタガタ言われるくらいなら、他に幾らでも仕事ある」

「そうだけどよお……………」

渋る信平をよそにライトは汗ばんだTシャツを脱ぎ捨てて、濡れたタオルで上半身を拭き始めた。脇腹は赤く腫れていた。

蒲田駅東口の歌広場にて、ライトのリサイタルが始まっていた。ブランキージェットシティの名曲【悪い人たち】やロッソの【千のタンバリン】を歌い上げてなお、勢いはとどまることを知らない。信平はライトの歌声が大好きである。時代さえ違えば、きっと俺たちだって有名になってたはずだ。信平は本気でそう思っていた。この国のロックは死んだ。2000年を境にして目立った大物ロックバンドは現れていない。

「なあアニキ、ミッシェルガンエレファントも頼むよ」

「ミッシェルか。ブランキー派だからあんまり曲知らねえな」

「ベタだけど、世界の終わりを頼むよ」

「OK！ 時間的にもこれがラストだな」

信平はリモコンを操作してミッシェルガンエレファントの世界の終わりをオーダーした。曲が流れだす間にはライトがMCを挟む。

「今日来てくれたみんな！ 本当にありがとう！ 俺たちは愛のために生まれて愛のために死んでいく。人生のほんの僅かな時間を。こうして出会えた仲間たちを。俺は全力で生きて散っていくから、見ててくれ、無様な俺を。愛すべきみんなにこの曲を捧げます」

信平はライトのMCを聴いて思わず笑いそうになったが、手で口を押えて堪えた。

「世界の終わり」

信平はレモンサワーを飲み干した。

カラオケの代金は全てライトが払った。「今日は俺のおごりだ！」と威勢よく言うので、信平は心配したが、ライトの財布には珍しく諭吉が2枚入っていたので、甘えることにした。

二人がカラオケ屋を出ると、正体不明の煙の臭いで咽た。煙はもくもくとして、視界が遮られる。アスファルトに顔を埋め、煙の正体を探る。向かいの雑居ビルから激しく黒煙が噴出している。逃げ惑う人々、飛び交う叫び声。サイレンが遠くから聞こえる。ライトは痛む腹部を左手で抑えながら、ほふく前進をして必死に逃げようとした。

「し、信平！ 絶対顔をあげるなよ」

「アニキ！ 先に逃げてくれ。俺はどの道長くない命だ。最後くらい人助けをして死にたい！」

「馬鹿野郎！ 何言ってやがるんだ」

ライトは無謀な行為に及ぼうとしている信平を諫めた。

信平は自動販売機で水を2本買い、それを頭から被った。そして火事場へと向かった。

「馬鹿！ こんなちんけな火災程度で死に急ぐ奴があるか！」

ライトは身をよじり立ち上がろうとした。その時、腹部に電気が走ったような痛みを感じて倒れた。到着した救急隊は真っ先にライトを運びだした。薄れゆく意識の中、アキラへの強い憎しみが脳内を支配していた。

奇しくも8月の満月スタージョーンムーンという特別な日だった。本来ならば満月は目標達成したことに感謝する日であり、また人にとっては罪が浮き彫りになる日でもある。月の歓喜と狂気の伝説は全世界に数えきれないほど語り継がれている。世の中は全て陰と陽で成り立っている。ライトの悪業を照らし出すように、月は真実の光で照らしていた。

12

8月31日、午後11時過ぎ、横浜ローズホテル内ブラスリーミリーラフォーレにて、アキラは元恋人の星崎詩音とバーカウンターにいた。詩音は星崎財閥の一人娘であり、資産の配当金だけで億を稼いでいる。9月13日に29歳になる。ライフワークとしてジャズボーカリストとしての一面を持つ。マジカルカラーは藍色で、とても美意識が高くお洒落である。また、深層心理に星を持つため、目立ちたがり屋でもある。

アキラは祈織が眠りについた後、涼子の部屋へ行こうとした。その時、ホテルのロビーで詩音と鉢合わせしたのだ。アキラは一瞬凍り付いた。詩音は笑っていた。彼女は本気で人を怒るとき一瞬だけ笑う癖がある。アキラは長年の経験で察知していた。詩音の不満と怒りは頂点に達している。7年目の浮気に対してはもう嫌というほど謝ってきた。だが、他に好きな女ができたというのでは話が違う。詩音は涼子と同じK大卒のエリートであるし、同じジャズ畑でお仕事しているという点までそっくりである。似たもの同士ゆえ、涼子にだけは負けたくないというプライドと意識が詩音の逆鱗に触れていることは、鈍感なアキラでも気づいていた。

二人、無言のまま悪戯に時間だけが経過していく。カウンター越しのバーテンダーは、さもこれが修羅場であることに気づいていて、その場から動けないでいる。店内にガトー・バルビエリのラスト・タンゴ・イン・パリが流れたその時、アキラが静寂を切り裂いた。

「実は気になっている人がいるんだ」

シャンディガフのグラスを傾けてアキラが言う。

「知ってるよ。私も気になってる人いるもん」

金髪のくるりとした髪をいじりながら詩音は言う。

「なんだ。お互い様だね」

「でも、涼子さんだけは許さない」

「違うよ。涼子さんじゃない……………」

「嘘つき」

詩音は首を左右に振る。アキラを睨みつけるその瞳はエクスタシーの絶頂へと上っていくときのそれと似ていた。曲はトゥーフォーザロードへと変わっていた。この曲の邦題は『いつも二人で』。アキラにとって詩音との過去がよぎる曲だった。

「運命ってこんなに簡単に終わっていいのかな？ ねえ占い師さん」

「解らない」

「占術は科学じゃなかったの？」

「科学でも解らないことはあるさ。例えば自分自身のこと」

「アキラ、ちょっと疲れてるのね」

「そうかもしれないな」

アキラのポケットにあるスマホからピコンッという通知音がした。Xからのお知らせだ。重要なアカウントだけは通知を鳴らすことにしている。何か事件でもあったか。

「詩音ちゃん。ちょっと失礼するよ」

「どうぞ」

アキラはジープンのバックポケットからスマホを取り出す。Xのアイコンには赤い文字で【1】と表記されている。クリックして詳細を確認する。

【蒲田駅東口で火災発生】

火事のニュースが入ってきました。東京都大田区蒲田でおよそ一時間前(2023年8月31日)の午後9時ごろ、「ビルから爆発音と煙」と消防に通報がありました。この火災によるけが人はまだ解っていません。今も懸命の消火活動が行われています。

アキラは今日が満月であることを知っていた。何か事件が起きてもおかしくはないと予測していたが、まさか地元で起きるとは予想もしていなかった。Xにはすでに蒲田の火事についてたくさんのポストがされている。祈織の身の上に悪魔が降りかかろうとしているのか。祈織の身の安全を考えるならば、情けないが、詩音の財力を借りなければならぬ。アキラは決断ができないでしり込みしていた。

「アキラどうしたの？ 頭抱えて」

詩音は母親のような口調で言った。その優しさは詩音が年下であるということを忘れさせた。まるで大きな海に包まれているような安心感を覚えた。

「実は蒲田駅近くで火災が起きているんだ」

「……………そうなんだ。でも、こんなの慰めにもならないかもしれないけど、アキラが巻き込まれなくて良かった」

詩音は精一杯明るく振舞おうとしていた。

「いや、僕が巻き込まれる分にはまだいい。だけど、涼子さんの紹介で出逢った祈織ちゃんという子が大変なんだ」

「いのりちゃん？」

「そう。祈りに織ると書いていのりちゃん」

「待ってアキラ。状況が良く掴めないんだけど……………」

「長くなるけど最後まで聞いてくれるかい？」

アキラは申し訳なくて視線を落とした。

「アキラが望むならば朝までだっていいわよ」

詩音の腹は固まっていた。

13

ローズホテル横浜のダイナスイートルームに、詩音と涼子を呼び出した。

祈織と詩音ははじめての顔合わせだったが、軽く自己紹介をして打ち解けたようだ。詩音との関係はうやむやになったが、全ては祈織の身を護るための作戦会議だ。

アキラを中心にして、右に祈織、左に詩音、その隣に涼子が座った。傍からみればまだ起きてない未来のために何を話すのか？ と馬鹿にされてもおかしくはないだろう。しかし、アキラには見えている。きっとライトは復讐に来る。その時に祈織が傍にいられると、はっきり言って邪魔なのだ。冷静に対話で解決するにしても、蹴りをいれた分だけは返ってくるだろう。しかし、占術にははっきりと出た。このままでは死人が出る、と。その不確かな未来のために、こうして女性陣に集まってもらっている。情けないことではあるが、占術師として、最悪の未来だけは避けたいのだ。

「アキラそれで、ライトって人本当に復讐に来るの？」

涼子が言う。

「ああ。それだけは間違いない」

アキラは腕を組み唇を結んだ。

「皆さん、私の事ですみません」

祈織が言う。「別に祈織ちゃんのせいじゃないよ」と詩音はかばう。

「それで、ターゲットは祈織ちゃんなの？ アキラなの？」

涼子は尋ねる。

「ライト君のターゲットは俺だが、奴は祈織ちゃんに好意を寄せている。それが問題なんだよ」

「でも、それって何が問題なの？」

詩音が口を挟む。

「長くなるけど聞いてくれ。そもそも、すべてはライト君の勘違いなんだ。僕と祈織ちゃんがラブホテルにいたのは間違いない。事実だけど、やましいことは何一つしていない。僕にセラピストとしての一面があることは涼子さん以外、みんな知っているはずだ。僕はあの夜、祈織ちゃんからの依頼でマッサージをしていた」

祈織は頬を赤くし、詩音は少しいら立っている。涼子はさほど驚かなかった。

「僕は蒲田という街を甘くみていた。まさか明け方に、同級生の部下から襲われるとは思ってもみなかった」

アキラは事件が起きることを薄々は解っていた。だが、こんな早くに起きるとは予想外だった。今でも衝撃を隠せない。アキラは話を続けた。

「まず、僕は占術師として、祈織ちゃんの周囲に問題児が集まる傾向にあると予測していた。しかし、その問題児が祈織ちゃんの幼馴染だということまでは、見抜けなかった」

「そんなのもう起こったことを何度も話しても仕方ないじゃない」

詩音は正論を言う。

「そう。だけど、占術が科学であるという僕のスタンスを明確にしたかったのと、予言が的中してしまったことを、改めて確認したかったんだ」

「アキラの占術の精度が高いことは私も良く知ってるわ。詩音だってそうでしょ？」

涼子の言い分には、詩音は黙って頷くだけしかできなかった。

「私のことだったら心配ありません。ライトだっていちおう幼馴染だし、私の方こそアキラさんから離れれば復讐なんてしないのではないのでしょうか」

祈織の言葉には満場一致で反対だった。

「そんなことしたら余計ダメだよ。祈織ちゃんをみすみす不幸にするわけにはいかない」

詩音が言うと涼子も頷く。

「そうそう。アキラが反対してるってのは祈織ちゃんとライト君の相性が悪いからでしょ？」

涼子が尋ねる。皆がアキラの顔を伺う。

「安壊という最悪の相性なんだよ」

「あんかい？」

詩音と涼子の息が揃う。

「そう、安壊。宿曜占星術という月の暦をベースとして占う占術において、安壊とは壊し壊される最悪の相性なんだ。この安壊の怖いところは、一目ぼれみたいに運命を感じて結ばれるのだけれど、最後は必ず、憎しみあって別れるということなんだ」

アキラ以外の一同が静まり返った。

アキラとしては脅すつもりはなかった。約40年に及ぶ人生経験の中での気づきと、古代から蓄積されたデータベースの信頼性の高さ。それらを基に判断していくのが占術である。もっとも、アキラは運気の流れみたいな非科学的なモノを読み解くことは得意ではないが、それは目には見えなくても事実存在する。本当の占いとはけっこう怖いものなのだ。それをあくまでもエンターテインメントとして提供しているだけに過ぎない。

「あんかい。祈織ちゃんとライト君の相性が悪いってことはもしかして……………」

詩音が言う。

「そう。僕と祈織ちゃんがソウルメイトである以上、ライト君とは安壊ということになる。しかも、相手の方が壊す側に回っているんで、敵わない面もある。そこで、詩音ちゃんと涼子さんに協力をお願いしたい」

「ゲームみたいで面白そうね。協力するわ」

涼子が言うと詩音も「当然私も協力する」と言って張り合った。

「山場は今日の満月から9月15日の新月。そして新月から9月29日の満月。この日の満月は中秋の名月と重なる。それまで逃げ切れば僕らの勝ちだ。ライト君の祈織ちゃんへの歪んだ愛情が断ち切れるのに、たった一か月で十分だ。ただし、涼子さんも詩音ちゃんもライブがある以上はそれを最優先して欲しい」

「わかったわ。9月29日にはバースデライブがあるからそれだけは外せない」

涼子が言う。

「私は大丈夫。ちょうどオフの期間だからいつでも協力するわ」

「じゃあ、詩音ちゃんと僕が行動を共にする。祈織ちゃんは涼子さんと一緒に行動して欲しい。ほとぼりが冷めるまで、しばらくは会えないけど、ライト君の気のすむ様に話し合ってもう二度と近寄らないように約束させるから」

祈織は寂しげな瞳で頷く。涼子は納得がいかないようだったが、詩音だけは元気だった。アキラの作戦は占術を基に決めたことだ。詩音とアキラは最高の相性である榮親であるから、恋心は抜きにしても、事件を解決するパートナーに最も適している。

初秋の横浜中華街の夜は更けていく。今日はみんなダイナスィートルームで一夜を過ごしてもらうことにした。順番にシャワーを浴びて、涼子と詩音はすぐに寝てしまった。祈織も寝たとばかりに思っていたが、深夜過ぎて、お腹が空いたといって起きてきた。アキラはコンビニへ行きチーズとハムと食パンを買ってきて、キッチンでホットサンドを作ってあげた。祈織はそれを食べ終えてココアを飲んで幸せそうだった。

「なんだか修学旅行みたいですわね」

化粧をおとし髪をヘアピンでとめている祈織が言うと、本当に高校生みたいだった。

「うん。でも僕は高校を中退しているから、修学旅行の経験は中学までかな。こんな修学旅行だったら最高だっただろうにな」

「アキラさんって頭いいのに意外ですね」

「まあ、高卒認定は取ってあるから、後は通信制の大学へ行けばいいだけだ。でも、今は仕事と小説の執筆で忙しくてね」

「私は看護大を出てますけど、絶対アキラさんの方が勉強できます。知識も広くて深いし。学歴だけじゃ頭の良さは測れないと思います」

「そんなことないよ。僕は自分が興味ある分野しか勉強しない」

「まあ、今日は修学旅行なんですから、それっぽい話題にしましょうよ」

「どんな話題だったら修学旅行っぽいの？」

アキラが無邪気に言うと祈織はいたずらっ子のような視線でアキラを見つめる。

「涼子さんと詩音さん。どっちが本命なんですか？」

「はあ？ ちょっと意味が解らないな」

「隠しても無駄です。私に対する態度と詩音さんや涼子さんと接する態度では、かなり温度差があります。それってやっぱり、男女の友情とか成立しないと思うんです」

「祈織ちゃんはなんか誤解してるよ。僕はこう見えてけっこう浮気性だよ。風俗遊びだってするし。祈織ちゃんとだってライト君のことがなければやることやってたかもしれない」

「意外にスケベなんですね。でも、嫌いじゃないです。アキラさんの場合、なんか解らないけど許せちゃう。逆に、一人の女性に縛られるイメージがないです」

「本当は僕だって一人の女性だけを愛し、愛されたい。でも、占い師をやっていることが余計に話をややこしくしている。詩音だって涼子さんだって占術を通せば僕の運命の人だ。占術なんか使わなければこんなに悩むこともなかったかもしれない。策士が策に溺れるとはこのことだよ」

「私は運命の人じゃないんですか？」

祈織はすこしつまらなそうに言う。

「運命の人だよ。だから悩んでいる……………」

「そんなに運命の人って多いんですか？」

「いや、普通の人達は近くにいるご縁ある人を伴侶に選ぶ。けれども、結婚してみてもじめて相性の良し悪しをすることになる。ある人は不倫に走り、ある人は風俗遊びまで不倫ではないと主張する。ごく一部の人達だけが運命の人と巡り会って一生を添い遂げることになるんだ」

「なんか結婚してまで不倫に走るとか嫌ですね」

「そうだね。さすがに僕も結婚したら不倫はしないかな」

「ねぇアキラさん。誰かと結婚する前に……」

そう言って祈織はアキラの近くに来て身を寄せる。

「もう一度キスして」

アキラは祈織の頬に手を添えて唇を奪った。

「ありがとうございます。これでもう充分です」

「よく眠れるといいね」

今度は祈織の方からアキラの首を掴みねっとりとしたキスをした。

「祈織ちゃん、これ以上は……」

そう言ってアキラは祈織をなだめる。

「おやすみなさい」

そう言って祈織はベッドへ向かって歩いていった。

14

長野信平の家族葬が東京都品川区戸越で行われた。信平の母親は信平が幼いころに亡くなっており、父親の手一つで育てられた。父親は大手家電メーカーの部長で、W大学を卒業している、いわばエリート街道を歩んできた人だ。代々、品川区の戸越に土地を持っており、お金には苦労はしなかったが、一人息子のことではだいぶ心労を重ねた。ライトのことも当初はあまり快くは思っていなかった。自身の人生経験からサラリーマンこそが最大の幸福者という価値観をもっていて、豪放磊落な信平に対しても、せめて大学だけは卒業するようにと口を酸っぱくして言ってきた。Fランクとはいえ、いちおう大卒の信平がまさか倉庫内軽作業のアルバイトに甘んじていることには、ショックを通り越して呆れていた。CDが売れないこのご時世に、しかもロックが衰退しているこの国で、ロックバンドで一旗揚げたいと言い出すのだから、もう自分の手には負えなかった。だから、あえてもう何も言わなかったのだが、まさか火事場に飛び込んで自殺まがいの行動に走るとは。警察に呼ばれた時には、バカ息子が亡くなったとせいせいしたと言いついて聞かせていたが、顔も焼けただれて解らない状態の中で、唯一、その死体が信平だと解ったのはタトゥーだった。信平は左胸に三つ巴のタトゥーを入れていた。その時、不思議と涙があふれてきてその場に倒れ込んで泣き明かしたのだ。

ライトは戸越まで来て足がすくんでいた。葬儀には呼ばれていないけど勝手に来てしまったからだ。

信平とはじめて出逢った戸越公園へと向かう。

門を入り大広場へと出てきた。

懐かしい、あの頃と何も変わっちゃいない。溪谷から滝の流れる音がする。池には枯葉が舞い落ちている。ウメ、サクラ、シャクナゲ、イチョウなど四季折々の花木が美しく、品川区民から愛されている由緒正しき公園だ。

ライトは時計を見る。時刻は10時を過ぎている。もうすでに葬儀が始まっててもおかしくない時間だ。太陽の光が眩しくて、サングラスをかけた。黒い喪服にサングラスとは一般的には嫌われるだろうけれど、ロック好きの信平の最後を見届けるにはこれが正装だ。

ベンチに腰をかけて、過去に想いを馳せる。

まだ若かった頃、この戸越公園来れば大物ギタリストに会えるチャンスがあると噂を聞き、毎日のようにアコースティックギターを持って通った。日本三大ギタリストの一人と呼ばれる人物に弟子入りしたかったのだ。幼馴染の祈織に淡い恋心を寄せながらも、

一人前の音楽家になるまでは告白はしないと決めていた。しかし、離れて暮らす祈織への想いは日に日に募る一方だった。だから、手っ取り早くプロデビューしたかったのだ。もちろん、売れないアーティストなんかに嫁に出すような家柄ではないことも解っていた。それでも、はじめて祈織に会った時の電撃が走るような体験を運命だと信じたかったのだ。連日、戸越公園に通って、このベンチに腰かけて弾き語りをしていた。ここの地元の奴らには白い目線で見られていたことにも気づいていた。心折れそうになった時、はじめてギターケースに金を入れてくれたのが信平だった。

一歳下だからって勝手にアニキ呼ばわりしてきて、大卒の癖にロックスターになりたいという夢を持ってドラムをやっていた。一人っ子だから、兄弟に憧れているのは解るが、まさか三流映画みたいに、義兄弟の誓いを交わすことになるとは夢にも思わなかった。『こういう昔から憧れてたんだよね』って信平は嬉しそうに。そんな可愛い義弟を見殺しにした。橋本アキラ、全てアイツのせいだ。俺の運命の人を奪い、信平の命を救うチャンスすら奪った。

「2023年8月31日、この日を、この屈辱を、俺は一生忘れない」

そう呟いてライトはタバコに火を付けた。

「安らかに眠れ、信平」

タバコを逆さにして土の中へ埋めた。線香なんて洒落たものは持ち合わせてないが、旅に出たお前へのせめてもの餞別だ。

ライトはアキラへの復讐を誓った。悪魔が憑依したのだ。

15

アキラと詩音はホテル暮らしをして2週間が経過した。

今日は9月15日、新月の日だ。

この2週間で、詩音との心の距離が近づいた気がしている。祈織を涼子の家に預けて、アキラチームはライトとの対話のチャンスを伺っていた。お金の面は星崎財閥の一人娘である詩音がいるので、なんの心配もなかった。有事にはすぐに蒲田に帰れるように、ローズホテルからJR東日本ホテルメッツ川崎へと拠点を移動した。

10時を過ぎて、詩音が本を買いたいというので、川崎駅直通のラゾーナ川崎へと向かう。

詩音はヒステリックグラマーのロングTシャツに星のモチーフが入ったジーパン、足元はヒールの高い黒のサンダルを履いている。アキラもジーパンと黒いTシャツにエメラルドグリーンのサマーカーディガンを羽織って腕の裾をまくっているラフなスタイルで出かけた。特別、街へ出るという意識はなく地元蒲田にいるような感覚で歩けるのが魅力的だ。

ラゾーナ川崎は2006年に開業した大型ショッピングモールで、主に20代から30代の女性やカップルをターゲットにしている。家族連れで来る人も多い。

大型書店に辿りつくと、アキラは真っ先に占いコーナーへと向かった。つられて詩音もくっついてくる。

アキラが手に取ったのは四柱推命の本。隣では詩音が2024年の運勢を立ち読みしていた。四柱推命とは、6世紀から7才世紀ごろの隋・唐の時代あたりから始まったとされる占いのことで、東洋占星術の中では一番的中率が高いとされている。アキラは運気が上がる色や数字が解る琉球占術と月の暦から占う宿曜占星術を使用しているが、独学で四柱推命の勉強もはじめているのだ。しかし、本を買うほどではない。すでにYouTubeなどの動画サイトで四柱推命の解説動画がたくさんあがっているからだ。それ以上の知識を求めるのであれば、40万弱のお金を払って弟子入りするしかないだろう。

過去にアキラは涼子との相性を調べてみたことがある。天地徳合という夫婦としては最高の相性だった。詩音とは干合という淫乱の合がでている。どちらも運命の人なのだ。そして、祈織とは支合という肉体的な結びつきが強い間柄と出る。この広い世の中で運命の人が三人もいる。神様は三人の中からたった一人を選べというのか。占術を学べば学ぶほど、生活自体は良くなっていくが、解らないことがたくさんありすぎる。

「わたし、来年の運気めっちゃいいみたい！」

詩音が興奮気味に言う。過去に想いを馳せていたアキラは現実に戻される。

「そうだね。詩音ちゃんは来年からまた運気がよくなるよ」

「スピーディに物事が進み、活発だって」

詩音は喜びを囁みしめた。

「まあ、その占い師さんは良いことしか言わないから」

「そうなんだ？」

「僕も基本的には良いことしか言わないけど、リアルな仲間にはきついことも言う」

「祈織ちゃんって運氣悪いの？」

「まあ、怖いこというようだけど、試練の年だよね。それを過ぎればだいぶ楽になる」

「それで、ライトって人、いつ頃復讐に来るの？」

「具体的な日にちまでは解らないけれど、新月の今日から9月29日の満月までの間かな。それをしのげば問題ない」

「祈織ちゃんは無事かしら」

「涼子さんが全面的に守ってくれているから大丈夫。そもそも、祈織ちゃんと涼子さんの関係は姉妹に近いものがあるから」

「でも、安心してはいけないね。蒲田の火災でも死者がでたみたいだし、なんだか不気味じゃん」

「そうだね。あるとあらゆるケースを想定しておかなければならない」

「さて、私は空手の本を探しにいくから、何かあったらLINEして」

「空手？ 相変わらず渋い趣味してるね」

「護身術だよ。自分の身は自分で守らないと。なんせアキラが頼りないからね」

「俺だって昔は……………」

「いじめられっ子だったくせに」

「仕方ないだろ？ 女を殴れと言うのか？」

「アキラは甘いよ。まずは、身体と心を鍛えて相手から舐められないようにしておくのが男子でしょ？」

「馬鹿は相手にするだけ無駄だよ！」

「なに怒ってんのよ！」

「サヨナラ」

アキラはそう言って逃げる様にショッピングモールの人込みの中へ入っていった。

アキラは久しぶりに頭にきていた。理由が何であれ、他人の自己評価を下げる人間は嫌いだ。それが例え、過去に愛した女であってもだ。そんなにひ弱な男がいやならば、空手家か柔道家とでも付き合えばいい。俺はあくまでも頭脳労働者なんだ。必要とあれば、頭脳で戦うのが流儀だ。今、バカにされたこと、冗談だったとしても許しはしない。もうこんなお遊びはおしまいにしよう。詩音とのペアは解消だ。

アキラは身一つでホテルを出ることにした。

詩音から買って貰った服などは、全てゴミにしていしまえばいい。財布とスマホ、替えの下着さえあれば大丈夫だ。肉弾戦は好きではないが、女に守ってもらうほど落ちぶれちゃいない。もし仮にライトと殴り合いの喧嘩になったとして、殴られてから交番に行けば、暴行罪か傷害罪で15年以下の懲役科すことができる。前科がついてしまえば、まともな職業に就くことはできない。竹田だって前科者を現場にいれるほど優しくはない。金がなきゃまた犯罪に手を染める恐れもあるが、祈織のことは諦めるだろう。アイツが復

讐したいのは俺だけだ。だったら、隠れているよりもこちらから呼び出して、ハメてやればいい。

アキラは冷静さを失っていた。着の身着のままで京浜東北線に乗り、ＪＲ蒲田へと向かう。ここが男たちの戦場か。叩かれて叩かれて、そして磨かれて本物の男になっていく。京浜東北線の車窓から多摩川が見える。東京と神奈川の県境だ。本来、地元で起こった喧嘩ならば地元でケリをつけるのが筋なのだろう。昔、よく見たヤンキー漫画の世界。それは子供じみたファンタジーだと思って馬鹿にしていた。けれども、憧れでもあった。

冷静と情熱の間で揺れ動くこの心。宮沢賢治が春の修羅ならば、俺は秋の修羅だ。

ＪＲ蒲田駅へ着くとすぐに涼子へＬＩＮＥ通話をした。

「アキラ？ 何したの？」

「涼子、いますぐお前が欲しい」

怒りに身を任せ修羅となったアキラはついには、餓鬼道まで堕ちた。

16

アキラは涼子を腕に抱き、天井を見上げている。
欲の全てを涼子にぶつけた。後に残るのは虚無感だけだ。五反田のシティホテルは以前、涼子とセックスしようとして未遂に終わった場所だった。ただ、悲しくて。ただ、会いたくて。涼子の顔がみたかった。

涼子は部屋に入ってきてすぐアキラに犯されている最中、何度も絶頂に達した。アキラは野暮なことは聞かない。こうして部屋にまで来たということが答えだからだ。

「ねえ、2回戦しようか」

涼子が甘い声を出す。アキラは裸のまま立ち上がった。

「2回戦は医者にとめられているんだ」

つまらない冗談を言うと、涼子は案外ウケた様子だった。

「なんだか漫画みたいなセリフね」

そう言って涼子もベッドから出た。

「次の展開は、横浜へ行く約束をする。電話がかかってきたところを私がフェラチオをする。アキラに急な仕事はいるけれど、車で横浜ふ頭に行って優しいキスをする」

「なんだ、知ってたのか」

「世代だもん」

「女性が見るような漫画じゃないぞ」

「あら、光栄ね。私のこと女として見てくれてたなんて」

「女じゃなかったらあんなことするかよ」

「ふふ」

涼子はゆっくりかがみ、アキラのペニスを咥えた。なまめかしく、ゆっくりと唾液をたらしながら。下からアキラの様子を伺う時、涼子の瞳は餓えた子犬のように憂いを帯びていた。

そろそろ絶頂に到ろうかという時、アキラのスマホが鳴った。星崎詩音と表示されている。アキラはスマホをベッドに放り投げて、涼子の後ろに回り激しくつき続けた。鏡越し涼子のEカップが揺れるたび、アキラは涼子の全てを支配したいと強く思った。

「詩音だったんでしょ？」

ランチを食べている最中に涼子が言う。アキラはオレンジジュースにミルク入れてストローでかき混ぜた。

「いや、めんどくさいクライアントだったから出なかった」

「へえ」

それが嘘だと言うことくらい涼子には解っていたはずだ。それ以上は訊ねてこなかった。

「ねえ、9月29日を過ぎたら復讐は終わるんでしょ？」

「そこまで逃げ切れたらね」

「それまでは？」

「正直、何されるか解らない。ナイフで刺される可能性だってある」

「え？ さすがにそこまでは……」

「いや、あるね。地元のツレに聞いたんだけど、今回の蒲田の火災で亡くなったのはライト君の友達だって話だ」

「それ、悪いけどアキラには関係ないじゃん」

「関係はないよ」

「アイツ何を考えているの？」

「さあ。さすがに神じゃないからそこまでは解らない。けれども、アイツの祈織ちゃんに対しての執着、俺に対する恨み、それに付け加えて大事な友達が亡くなったらしい。仕事にも来ていない。ということは、アイツはこの数週間で全てを失ったんだ」

「全てを失ったからって……」

「一緒に仕事もしたけど、リアルでも占術を使っても、そういう奴なんだよ」

「可哀相な人ね。単なる逆恨みじゃない」

「そう。だけど、こうなることは占術で予測していた。後は単純に、リアルで会った時に、貯金がないことや仕事でも一日働いて一万二千元しか貰っていないことも聞いていた。そこに来て今度は仕事にもでていないとなると、次の仕事を始めたとしても、もう俺らを追いかけるだけの経済的余力はないんだよ」

「だったらさ、祈織ちゃんを連れて沖縄にでも行ってたら？」

「沖縄かぁ」

「私は9月29日にバースデイライブがあるから、それまでは正直忙しい。でも祈織ちゃんは有給休暇でフリーだから、後はアキラが大丈夫であれば」

「僕だったら大丈夫だよ。すでにノマドワーカーだからさ」

「それじゃ決まり！ 最高なプランじゃない」

アキラはズボンを履こうとした。その時、涼子がズボンを奪い取り何かを差し出した。

「な、なんだ？」

涼子はアキラの口にカプセルのようなものを突っ込んだ。そして、水を差し出した。

「飲んで。元気になるから」

「んぐぐ。バイアグラかよ」

「ふふ。だってしばらく会えないじゃない」

アキラは「こんなの効くのかよ？」と疑問を投げかけたが、40分ほどでアキラの股間はもりもりと立ち始めた。エロ過ぎるピアニストの甘い囁と熱すぎる情事。

17

五反田の涼子の自宅にて祈織と落ち合う。アキラは母親からお小遣いをもらい、さらに沖縄の親戚のおじさんとおばさんから幾ばくかの資金援助をして頂いて、旅の資金に加算した。ライトが祈織の実家を知っている以上、今、家に帰すのは危険だ。祈織の衣服も買ってあげなければならない。もっとも、経済的に自立していて田園調布の実家住まいの祈織のことだから、むしろ買って貰うことの方が多いのかもしれないが。

涼子のマンションは防音対策が万全で3LDKという間取りだ。製作部屋と書斎があり寝室がある。二人でもくつろげるくらい広い部屋に住んでいることで、祈織も随分リラックスしている。涼子はここ数日、製作部屋に引きこもりっぱなしだったらしい。毎年バースデーライブには新曲を書きおろしている。

「アキラそろそろじゃない？」

昨日の妖艶な姿とは打って変わって髪の毛がボサボサの浪人生のような恰好した涼子と言う。

「じゃあ祈織ちゃん、行こうか」

「はい」

手荷物もカバン一つだけの沖縄旅はこれがはじめてではない。だが、金持ちの詩音と一緒にないのは少しだけ心もとない。詩音には冷たくしすぎたかもしれないが、それもまた運命だ。

9月の風が吹き抜けていく。どこか懐かしくて、少しせつなくて。涼子と会えない日々が続くが、セックスから始まった恋愛の行きつく先が幸福であるよう祈った。

五反田駅前でタクシーを拾う。

時刻は13時半過ぎ。フライト予定時刻は15時30分のスカイマークなので、一時間前には羽田に着く予定だ。

祈織はずっとユニクロとGUのコーデで我慢してもらっている。しかし、何も悪いことをしていないというのに、わざわざ沖縄へと逃避行しなければならないとは。

羽田のロビーに到着すると、ライトに張られている可能性を考慮し、展望デッキへと向かった。ここならば、不意に後ろから刺されることはないだろう。

太陽の日差しが雲に隠れた。天気予報では雨は降らないらしい。ジェットエンジンを吹かしながら飛行機が次々と飛んでいく。

「アキラさん。ライトは沖縄まで追ってきますかね？」

「まあ90パーセントない。残りの可能性は消費者金融に金を借りるくらいだけど、よっぽど大物のスポンサーがつかない限りないよ」

「そうですよね。ライトの財布みたら、2千円しか入ってなくてびっくりしました」

「まァ、肉体労働者だから、あまり大金は入れられないんだよ」

「そうなんですか？」

「うん。作業してるとお尻にも汗かいてバックポケットにしまってあるお札が濡れちゃうこともあるからね。それに、盗まれる可能性だってあるから」

「それにしても、蒲田で飲んでた割には所持金が少ないような……………」

「まァ、あんまりお金持っていないのは想像つくよ。一日汗まみれで働いたって一万二千円しか貰えない。しかも、天候不良や現場がなかったら休まされて稼げない」

「ライトの事は嫌いではないけれど、好きでもない。なぜ結婚をほのめかすようなことを言ったのか。謎です」

「夢追い人というのは、夢を食べて生きている。現実がよく見えていないんだよ。でも、それは僕にも同じことが言える」

「アキラさんは夢つかめる人ですよ」

「だといいんだけど」

「さァ、そろそろ行きましょ」

祈織に手を引かれて展望デッキを後にした。手と手から伝わってくるその波動は、まだ汚れを知らない少女のように柔らかく温かい。

初めて詩音とキスした時を思いだした。いい人の一人や二人いてもおかしくないような活発な性格のくせして、まだ男性経験もなかったなんて信じられなかった。「セックスって気持ちいいの？」って涙目で聞いてくる彼女のこと、この子だけは大切にしなきゃいけないって誓ったのに。些細な口喧嘩でまた離れて、もう寄りを戻すことはないだろう。今はただ守りたいだけなのだ。僕の隣にいる純白の天使を。

アキラと祈織は沖縄へとやってきた。

9月も中旬だというのに、まだ夏真っ盛りといった気候だ。東京だともうこの時間は暗くなっているというのに、太陽の光が眩しい。アキラは久しぶりに来たなと感慨深い思いでいた。去年の今頃は涼子と旅を共にした。出逢ってまだ数時間しか経っていないというのに、ベッドに誘われたこと。詩音との純愛、涼子との情事、その全ての記憶がこの琉球王国に宿っている。国際通りのあのパワーストーンショップは涼子が国産の天然の翡翠を買った場所だ。

祈織ははじめての沖縄ということなので、定番の国際通りに連れてきたのだ。約1.6キロに及ぶメインストリートには、民芸店、パワーストーン屋、ステーキハウス、公設市場、ドン・キホーテなどが軒を連ねる。一步でも小道に入ってしまうと、昭和レトロなおもちゃ屋やお土産屋などがひしめき合っている。どれも同じようなものを売っているのはご愛敬だろう。

どこからか三線の音が聴こえてくる。心に優しく響き渡るようなその音色。ドミファソシドの琉球音階から放たれる旋律。人々の心は踊る。商売人たちはそれに便乗して、声をかけてくる。琉球ガラスの美しいプレスレットに魅了されてしまう。

「アキラさん、沖縄って日本じゃないみたいですね！」

興奮気味に祈織が言う。

「ここは江戸時代まで琉球王国という独立した国家だったからね」

「そうか。高校の時に習いました」

「夕飯前だけど、お菓子かアイスでも食べようか？」

「いいですね！ あ、あのアイス屋さん有名ですよ」

祈織が指さした方向にアイスクリーム屋があった。ブルーシールは沖縄の米軍基地が発祥の地である。

「最近では横浜にもあるよね」

「ワールドポーターズにあるみたいですね」

「さすが横浜は僕の第2の故郷だよ」

懐かし気にアキラが言う。

「ちょっと一休みしていきませんか？」

「OK！」

オレンジとブルーの看板の下、たくさんのアイスの見本が置かれている。期間限定のトロピカルヨーグルトが美味しそうだが、なぜかいつも紅芋をオーダーしてしまう。

「わたし美らいちごミルクにします！」

興奮気味に言う祈織の横顔をみて、修学旅行にでも来た気分になる。店員からカップを渡されるとき、祈織は「うわぁ〜」と言って、その美しさに酔いしれていた。

店内が混んでいたため、外のベンチ腰を掛けてアイスを食べる。祈織がアイスをスプーンですくって口へと運ぶ。言葉にならないといった様子だ。

「祈織ちゃんはどうして看護師になろうと思ったの？」

「おばあちゃんが病気で亡くなってるんです。生前、おばあちゃんの看病をしているうちに、人助けができるお仕事に就きたいと思うようになりました。まだ中学生くらいでしたから解らなかったけれど、進路を決まるときに友達から看護師が向いてると言われて、そのまま今に至るって感じです」

「そうか。おばあちゃんっ子だったんだね」

「はい。おばあちゃんは小さい頃、ライトのことも可愛がってましたよ。彼は小さいころ野球少年で、よく多摩川で素振りをしていていました。その傍で私はおばあちゃんといっしょにバトミントンをやってましたね」

「ライト君は占術を通してイケメンなんだけどね。祈織ちゃん一筋で生きてきたんだね」

「困ります。私、そんなに純潔じゃありませんから」

「まァ、生きてれば出会い別れあるからね」

詩音とは違ってヴァージンということではなさそうだ。それが普通なのだし健全なのだが、なぜか寂しい気持ちにもなった。

「詩音さんはアキラさんにヴァージンを捧げたのですよね？」

祈織のセリフにアキラは言葉に詰まる。「そうだね」と告げ空を仰ぐ。

「失礼なこと聞いちゃってすみません。私も詩音さんみたいに運命の人と結ばれたかったです」

「まァ、僕は意外と遊び人だから気にしないで」

「アキラさんは遊び人なんかじゃありませんよ。ただ優しいだけです」

「優しい？ 僕が？」

「ちょっとだけ雰囲気流されやすいだけです」

そう言って祈織はくすくすと笑って残りのアイスを平らげた。

国際通りは街灯の明かりが付いて少しだけ涼しい風が吹いていた。風でヤシの木が揺れれば、二日月がうっすらと見え隠れしている。ここは恋人たちの永遠の憧れ、琉球王国の歴史あるストリート。外国人たちがビンのコカ・コーラを飲みながら歩いていく。

「沖縄ってパワーストーン屋さん多いですね」

「そうだね。本物のパワーストーンが欲しかったら、スリランカか沖縄かって言われている。沖縄は聖地もおおいからね。」

「おすすめのパワーストーンとあってありますか？」

「予算にもよるけど、だいたい1万円から3万円くらい予算組んでもらえれば、かなり素敵でパワーあるプレスが買えるよ」

「じゃあ10万円出します」

にっこりとして祈織が言う。

「え？ 大丈夫？」心配そうにアキラが尋ねる。

「はい。全く問題ないです」
「じゃあ、特別なお店を紹介するよ」
「やったー！ 楽しみです」
喜々として祈織は言った。

国際通りをまっすぐ歩いていくとゆいれーの牧志駅が見えてきた。広場に出ると、ダイワホテル直通のカーゴスがある。このショッピングモール内にはアキラが業務提携しているミラクルスポット本店がある。エスカレーターで2階まで登るとピンクの看板がミラクルスポットの目印だ。

閉店までまだ一時間はある。今から鑑定を出してセレクトしてもらえば、まだ間に合うだろう。

アキラは店の中を覗いて一瞬目を疑った。トップ鑑定師の佳子がいたからだ。佳子はマジカルカラー白のワンピースを着ていて、ラッキーカラーの青いカーディガンを羽織っている。胸元には楕円形のジューズである天珠を連ねたネックレスをかけている。アキラの4歳年上でおねえちゃん的存在である。

「佳子先生、お久しぶりです」

「あら、アキラ君。沖縄来てたのね」

佳子は千代田区を拠点に活動しているが、沖縄にも別邸を持っている。ミラクルスポットを開業した時から約10年間は沖縄暮らしが続いた。夢だった東京進出を叶えても、こうして思い出の地である沖縄で再会できるとは思ってもみなかった。

「お連れの方は新しい彼女さんかしら？」

佳子は垂れた瞳でじろじろと祈織を物色する。

「はじめまして。遠野祈織です。宜しくお願いします」

祈織は軽くお辞儀をした。アキラは簡単に佳子を紹介した。セレクトブレスの予算を佳子に伝える。佳子が鑑定書を出すまでの間、お茶を飲んで祈織と雑談していた。

「祈織さんはマジカルカラー白ですね！」

「白ですか？ 大好きな色です！」

嬉しそうにはしゃぐ祈織を見てほっとした。マジカルカラーは運気が上がる色だが、好きな人と嫌いな人に分かれる。マジカルカラーが大好きということは運気があがっている証拠だ。

「白は何色にでも染まるという性質から、マジカルカラー9色ある中で、一番成功する可能性が高いです」

「私、看護師なんです。制服が白なので、運が良かったのかもしれないね」

「とても自分に正直に生きてきた証だと思います」

佳子が鑑定書に目を落とす。

「やはり祈織さんにとって看護師というのは天職のようです。後はマジカルナンバーは5ですね。心の奥底では癒しを求めています」

「5ですね！大切にします。癒しは求めています。アキラさんと懇意にさせて頂いてるのも一緒にいると癒されるからです」

「アキラ君は属性が緑樹だからねえ〜。癒し癒されたい人です。祈織さんとアキラ君は好相性ですよ！祈織さんも優しくされたい願望が強いですから。一緒にいるだけで運気があがります。それと、環境に影響されやすいですから、その辺りは注意が必要です」

アキラは佳子と祈織のやりとりを静かに聞いていた。確かに、マジカルナンバー5は深層心理でいうと【樹】にあたるので、祈織は優しさを求めていたのかと再確認した。

「パーソナルではより自覚されている性格がわかるのですが、祈織さんは守り守られる性格をしています。組織において守る人は必須ですので、どこの職場に行っても必ず守られます。基準となるべき性格ですので、ルールや法則は厳格に守ります。例えば、漫画を買うときに、面白しろそうな巻から買うのがアキラ君だとすると、祈織さんは一巻から順を追って買わないと気が済まないタイプです」

「えー当たってます。まず、遅刻する人の気持ちが解りません。漫画も絶対に一巻から揃えていきます。なんでそんなに解るんですか？」

祈織が佳子に尋ねると「プロファイリングですから」と短く返した。確かにプロファイリングはFBIでも使われているくらい信頼度が高い。そして、付き合いが長くなっていくほどに、データが増えていく。究極は、何も言わなくてもわかるような関係性になることだってできるだろう。この占術を悪用されたら非常に困る。だから、協会員になるためには、幾つものフィルターを潜り抜けなければならない。

「さて、そろそろパワーストーンのセレクトをしたいのですが、ご予算は10万円です。よろしかったですか？」

「はい」

はじめてセレクトするときは1万から3万円がミラクルスポットの相場だ。いきなり10万円も出せるのは、祈織が日本屈指の高級住宅街である田園調布に住むお嬢様だからだろう。星崎財閥の一人娘の詩音は30万円のスーパーセブンを買った。しかし涼子は初めてのパワーストーン購入で50万円も出した。祈織の10万円のセレクトが可愛らしく思ってしまう。

「祈織さん、アキラ君からも聞いているとは思いますが、運気を上げるためには魔を遠ざける必要があります。マジカルカラー白の方は特に環境やお付き合い人に影響されやすいので、縁切りの特別なパワーストーンを入れたいと思います」

そう言って佳子はガラス張りのケースの中から一つの楕円形の天珠を取り出した。

「これは天珠といってチベットの王族しかもてなかった珍しいパワーストーンです。ショウケースの中を見てもらえとお分かりだと思いますが、色んな模様が入った天珠があります。これは、息増壊(そくぞうかい)天珠(てんじゅ)と言って縁切りのパワーストーンです。悪縁を遠ざけ、良縁を呼び込む強力な天珠ですので、当店でも人気ですよ。このパワーストーンに、シルバーチルクォーツを合わせたいと思っています」

「先生にお任せ致します」

祈織は不思議に思ったはずだ。ライトから追われている身の上話は一切していないはずだ。佳子は鑑定書から読み解いたのだ。占術は魔法ではない、統計学であり科学だ。

佳子は息増壊天珠の周りにシルバーチルを一粒づつ並べていく。カット水晶をちり

ばめて、一つ一つ丁寧にゴムに通していく。最後に念を込めてゴムを結んだ。

「これで出来上がりです。腕に通してみてください」

そう言って佳子は出来上がったばかりのブレスレットを祈織に手渡した。

祈織は「うわぁ」と感嘆の声をあげて、その美しさに見惚れていた。

シルバーチルは水晶の中に針のような銀色の線が何本も内包されていて、光の下で見ると輝きが眩い。佳子は出来上がったブレスをもう一度返してもらい、チベットの秘宝であるシンキングボールで浄化した。シンキングボールはお寺や仏壇に置いてあるりんのような形状をしていて、棒でその周囲を撫でていくとヴォーンという音が響き渡る。供養の祈りを極楽浄土まで届けるという意味がある。ブレスレットが受けた汚れを払うことを浄化という。

「なんだかさっきよりも輝きが増した気がします」

祈織にとって浄化は初めての体験である。アキラもはじめてシンキングボールでブレスレットを浄化してもらった時には、その音色の美しさと効果に衝撃をうけた。特に、邪気だらけの人間に対して、シンキングボールの音色を聴かせると途端におとなしくなるのがいまだに不思議で仕方ない。

「精一杯、真心こめて作成させて頂きました。どうか祈織さんの周囲が穏やかになりますようお祈りしてます」

佳子が言うと祈織は「ありがとうございました」と深々と頭を下げた。

たぶん佳子も鑑定書から祈織とライトとの悪縁を見抜いたはずだ。その悪縁を断つためにもパワーストーンの後押しが必要だろう。息増壊天珠とはそういうパワーストーンなのだ。良縁であるか悪縁であるかは、本人には解らないものだ。

ミラクルスポットの閉店間際まで佳子と雑談した後、祈織とホテルへ戻ってきた。沖縄の風と海を感じるハイアットリージェンシのツインルームはベッドの距離が近くて、いつでも寝込みを襲えそうだ。涼子ならば迷わず向こうのほから仕掛けてくるだろう。明日は祈織の服や下着を買いに出かけなければならない。

22時近くになって、まだ夕食をとっていないことに気づいた。せっかくだからレストランにでも行きたかったが、沖縄の店は閉まるのが早い。祈織にどうするかと尋ねたら、沖縄のコンビニに行ってみたいと言うので、近くのファミリーマートへと向かう。

「アキラさんなみ汁ってなんですか？」

「モツのことだね。沖縄の郷土料理だよ。美味しいよ」

「へえ～今度食べてみたいです」

「定食屋とか嫌じゃなければ連れてってあげるね」

「沖縄ってゴーヤチャンプルーとかですよ。あれ大好きなんです」

「そうなんだ？ ゴーヤ食べれるなら島ラッキョウとかもおすすめだよ」

「居酒屋にすればよかったですね」

「お酒けっこう飲むんだ？」

「お酒は弱いんですけど雰囲気が好きなんですよ」

「僕は沖縄そばとジュシーにしようかな」

アキラは新商品の沖縄そばを手取る。確か、ホテルの一階ロビーに電子レンジがあったはずだ。沖縄そばは毎日でも食べたいくらい飽きがこない。

「ジュシーって沖縄の混ぜご飯みたいですね。私もアキラさんと同じにしょ」

祈織も同じものを買ってコンビニを出た。自然のうちに手と手を繋いで歩いていた。祈織は恋愛では奥手なほうだと占いに出ているのだが、特別気にもしなかった。一緒にいることが空気のような存在で自然体でいられる。同じ食べ物を選ぶだけでなく、分身のような感覚になる。あまりにも居心地が良すぎて、前世では夫婦だったのではないかと錯覚するくらいだ。アキラも祈織も宿曜占術では奎宿と出る。同じ宿同志の関係を【命】と呼び前世からのソウルメイトとされているのだ。

ハイアットリージェンシーへ帰る最後の交差点で、アキラは見知らぬ男と目が合った。マスクと帽子をしていて素性も解らないが、因縁を付けられたような嫌な感じがした。まあ、地元の蒲田でも因縁を付けられることはよくあることだし、いちおうアキラだってインディーズの世界では名の知れた小説家であるから、身バレしている可能性だってある。顔写真を公表するかしないかは作家の自由だが、顔出しした方が貰える仕事は多いらしい。小説スクールの先生が言うのだから事実なのだろう。世の中、才能あるものに嫉妬する人間は意外と多いのかもしれない。そうポジティブに捉えている。

ホテルまでたどり着くと一階にある電子レンジで沖縄そばを温めてから5階へと上がった。マジカルナンバー5番の者同士たまたま5階が空いてたのも神の意思だろう。

祈織はファミリーマートでTシャツと下着も買っていたようだ。アキラはタバコを吸うから匂いには鈍感だが、自分自身で汗臭いと感じたのだろう。ライトから逃げきる目的とはいえ、準備もできずに旅に出てきたことを申し訳なく思う。まだ夏のような気候でTシャツでも充分だが、本当はお洒落してきたかったはずだ。

「アキラさんはサイズLでよかったですか？」

「え？ 僕の分も買ってくれたの？」

「はい。ちょっとタバコの匂いしもので……………」

「それはごめん。すぐにシャワー浴びてくるよ」

アキラは真っ先に風呂場に向かった。おもむろに服を脱ぎ捨ててシャワーを浴びる。ほてった身体には冷水が気持ちいい。シャンプーを泡立ててごしごしと髪の毛を洗い、タオルにボディーソープを垂らした時に気づいた。替えの下着がない。さすがにノーパンで寝る訳にもいかない。隣に女性が眠る以上は、なんか履いておかないとムラムラきしてしまうことだってあるのだ。

アキラは頭を抱えた。ノープランの旅には慣れていたはずだが、それは一人旅限定の話である。ああ祈織を傷つけたくはない。知らぬ顔してもう一日だけ同じパンツを履くしかない。それから後で、コンビニに買いに行けばいいだけの話だ。

アキラは風呂場を出た。さっき自分が脱いだ服はなく、洗面台の脇にホテルのアメニティのバスローブが置かれていた。祈織が気を利かせてフロントにコールして取り寄せたのだろう。まあ後でコンビニに行くからノーパンでもいいか。髪の毛を乾かして、洗面所を後にする。

リラックスマードの祈織がテーブルにお菓子や酒などを広げていた。

「おかえりなさいませ。ご主人様」

アニオタの聖地・秋葉原のメイド喫茶ながらのセリフに思わず吹いた。

「祈織ちゃん。ウケる。そんな趣味あったんだ？」

「なんのことだか解りませんにゃ」

招き猫のようなポーズをして祈織が言う。マジカルカラー白で影響されやすいとはいえ、一体どこのだれから影響を受けたのか。ふとアキラは時計を見た。もう23時過ぎている。早く祈織を寝かしつけて、寝た後でコンビニへ行こう。

「祈織ちゃん、お菓子もいいけど先にお風呂入っておいで」

父親のような温かみを込めてアキラが言う。

「はい」

アキラにとって祈織のこういう素直さがとても可愛いのだ。祈織は洗面所へと入っていった。

アキラはベッドにダイブして、寝がえりをうち大の字になった。今日はとても疲れた。そういえば、祈織のラッキーナンバーは幾つだったろうか。気になってスマホから鑑定書を出した。ラッキーナンバー【7】という数字が出た。意外に浮気性ということが解る。詩音のラッキーナンバーは【1】かなり潔癖症で好きな人とししか性行為はしない。涼子は【8】かなりの変態で色んな人と性行為に及ぶ可能性がある。そうか、祈織は【7】なのか。では、ヴァージンってわけではないな。そんなことを思いながらアキラは瞳を閉じた。

20

夢を観ていた。

涼子が他の男と寝る夢を。生々しいその夢の中で、涼子は男のペニスを咥え、唾液を垂らしながら美味しそうにしゃぶる。男の顔はみえない。涼子は男に倒されて、挿入される。男は涼子の熟した胸を揉みしだき激しくピストンしていく。喘ぎ声をあげる涼子の首を右手で締め上げて、解放したと思ったら、今度はディープキスをした。揺れながら涼子は何を思っていただろうか。次の瞬間、男の顔が浮かんだ。ライトだ。

アキラははっとして、瞳を開けた。

下半身に血が巡っていくのが解る。それ以上に気持ちいい。気が付けば、祈織がペニスを咥えてフェラチオをしていた。無意識の中で、もっと激しくしゃぶれと命令する自分がいる。これは夢ではない。

祈織のヌードはとても可愛らしくて、乳首はピンク色をしてツンツンとしている。

奇麗なおわん型のCカップに触りたいと思い、祈織を引き寄せて押し倒した。

無我夢中に祈織のおっぱいをしゃぶった。

もうこれ以上ないくらいしゃぶりつくしたあと、口づけを交わす。

唇をはなそうとすると、祈織は首根っこを掴んで、キスをねだる。

(もうどうにでもなれ!) 祈織の陰部を手で愛撫しながら、激しくキスを繰り返す。

祈織のアソコは愛液でびしょびしょだ。

「来て」

祈織のセリフに下半身が反応する。ペニスを祈織の陰部にこすりつけ、ぬるっと中へと入っていった。この瞬間が言葉にならないほど最高に気持ちいい。

後のことは覚えていない。確かなのは、裸のままの祈織が隣ですやすやすと寝ていることだ。幸せそうに笑みを浮かべている。この幸せなど儚く消えてしまうというのに。

アキラはそっとベッドから降りて着替えた。タバコとライターと携帯灰皿、少しばかりの小銭を持ってホテルの外へ出た。

星々の声が聞こえてくる。満天の星空の下。詩音との純愛こそが守り通すべき愛だったのではないだろうか。そんなことを思い、勝手に笑いがこみ上げてきた。

冷たい缶コーヒーを買ってタバコに火を付ける。結局は、チームの仲間全員と身体の関係を持ってしまった。そのことを知るのは祈織だけだ。この秘密を共有しながら生きていけるほど、図太い神経は持ち合わせていない。

アキラはアスファルトに座って空を眺めていた。急に詩音が恋しくなるなんて、今更、遅すぎる。本当に大切なものは失ってみてはじめて解るのだ。もっとも、祈織と二人きり

で旅に出ることを勧めてきた涼子は、こうなることを予測していたのかもしれない。占術は科学とはいえ、人の心の機微までは読み取れやしない。人生はなるようにしかならない。

アキラの視界の先、日焼けした胸の大きい女とスキンヘッドの男が歩いている。

(詩音?)

こんなところにいるはずもないのに、馬鹿げている。しかし、女が履いている星ガラのモチーフのジーンズは詩音の物と全く同じだ。

(まさか)

裏切り。詩音が寝返って反撃をしようと沖縄に来たとしたら。しかもライトも連れているとしたら、全く何が狙いなのか解らない。

こうしちゃいられない。祈織を起こして今夜中に逃げなければならない。詩音が何を求めているのかは全く解らない。これは占術で読み解ける範疇を超えている。最後には神を捨てる覚悟が必要になってくるだろう。アキラは詩音が完全にこちらに気づいていないと確認してから、祈織が待つ部屋へと急いだ。

21

寝ていた祈織を起こして、状況を説明した。祈織は信じられないといった表情を浮かべている。まさか、沖縄まで追っかけてくる財力などないと予測していたからだ。それはアキラも同じだ。しかし、どうやら詩音がライトと接近を図り、莫大な財力を武器にして何か意図をもって追っかけてきた。詩音の目的が何なのかは解らない。

「祈織ちゃん。ここは危険だ。すぐに場所を移そう」

「まさか、沖縄まで復讐しにくるなんて。その努力を他に向ければいいのに。だから、ライトは嫌いなんです。昔からそうです。勉強もスポーツも全て中途半端。何かを最後まで成し遂げたことなんてないはずですよ」

「まあ、祈織ちゃんの気持ちは良くわかる。本当に好きなんだったら、相手の幸福をいちばんに考えるのが本当の恋愛だ。あまりにも身勝手すぎる」

「それで、アキラさんが見かけた人は詩音さんで間違いないんですか？」

「間違いなく詩音だと思う。あの星のモチーフが入ったジーンズは、ディーゼル社がわざわざ詩音のためだけに作ったジーンズなんだ。しかもそれをカスタマイズしている」

「わざわざ身バレするような恰好で来たってことは、アキラさんに見つけて欲しかったのでしょうか？」

「今のところ解らない。川崎で喧嘩して別れてきたから、長い付き合いだけどそういうのはじめてなんだよ」

「この時間からどこに逃げればいいのか……」

「恐らく星崎財閥の娘である詩音を敵に回したとするならばかなり手ごわい。スマホですらハッキングされている恐れがある」

「スマホをハッキング？」

「そう。企業とかもユーザーのGPS機能を使って、現在地を特定することができる世の中なんだ。それを悪用することは犯罪だが、詩音なら犯罪すらもみ消すことができる」

「では、詩音さんと組んでいた方が安全だったってわけですね？」

「ごめん。詩音が僕の信念を否定するようなことを言ってきたから、つい頭にきてケンカ別れした」

「でも、いいです。仮に殺されたとしても、私はアキラさんと一緒に沖縄を旅できたことで後悔はないです」

「まだ人生の楽しみはこれからじゃないか。方法はまだある。僕は諦めない」

「ライトは喧嘩弱いですけど、キレると何をするか解りません。小学校の頃、意味もなく同級生にカッターナイフで切りつける事件がありました」

「弱いやつほど武器に走る。僕の友達でもそういう奴がいる。ある意味、病気なのかもしれない」

「アキラさん。わたし、アキラさんと一つになれて幸せでした」

「今生の別れみたいなこと言わないで。僕が守るから」

「もし、生きて帰れたら……………」

「その先は言わないで。辛くなるから」

アキラは祈織を強く抱き寄せた。純愛とセックスから始まる恋と鑑定から繋がる恋。そのどれも選べない自分は世界一情けない男だ。彼女たちが魅力的すぎるから悪いのだ。祈織とキスをする時、自分が吸ったタバコフレーバーがしてほろ苦かった。

「まずは、状況を整理しよう。詩音とライトは間違いなくこのホテルに宿泊している。でも、詩音は赤子みたいに寝るのが早いんだ。ライトと一緒にの部屋に泊まっているとしても、詩音だけ寝てしまえば、頭脳戦でこちらが有利だ。まずは念のためにスマホの電源を落とそう」

アキラの提案に祈織は「はい」と素直に答えた。アキラは続けて言う。

「これからさきの行方はGPS機能をハッキングできないので、向こうは勘を頼るしかない。詩音は占術の初級鑑定師だけど、はっきり言って素人みたいなものだ」

アキラがスマホの電源を落とそうとした瞬間、LINEからの着信があった。ライトからだった。

「ちきしょう、めんどくさいやつだな。自分がしていることがこんなにも人を恐怖のどん底に陥れていること解ってるのか」

アキラは無視して、電源を落とした。祈織は恐怖で震えていた。

「明け方になったら、張り込みされる恐れもありますよね？」

「そうだね。できれば深夜のうちにどこかに逃げたい」

「もうすでにロビーで張り込みしてるのでは？」

「そんな根性はないと思う。占術上でもリアルを見ててもそう思う」

「じゃあ詩音さんが寝ている隙がチャンスですね！」

「そうだね。詩音はああ見えてK大卒のエリートだから頭もキレる」

「詩音さんがバックについている以上。9月29日まで逃げ切るプランは白紙ですか？」

「いや、詩音はあくまでも利用しているだけだと思うから、利害関係がなくなればあっさりライトを切るよ」

「ひょっとして、アキラさんと寄りを戻すためだけに来たのでは？」

「……………」

アキラは薄々解っている。詩音は執念深い一面がある上、まだ会ってもいなかったのに自分のことを運命の人だと決めつけて、ヴァージンまで捧げた。しかし、今となってはその愛が重いのだ。

「そうだ。佳子先生の家へ行こう」

「佳子先生ってさっきの占い師さんですか？」

「そう。この時間でも家でお仕事してるはずだから」

「私、荷物まとめておきます」

「いや、悪いけれど、衣服とかは捨てて最低限の荷物で行こう。行けば何とかしてくれるはずだから」

「解りました！」

「僕は今から一瞬だけスマホの電源をいれて佳子先生の電話番号をメモする。そして、すぐに電源を落とす。ホテルの外線から佳子先生に連絡しとくね！」

アキラは祈織の身を護るためだったらなんでもすると誓った。佳子はかなり忙しい身の上だが、遠くの親戚よりも近くの他人の方が力になってくれることもある。佳子の家に逃げた後は、沖縄の親族の家に逃げることも頭に入れながら、佳子へ電話した。

アキラはホテルのフロントに大げさな嘘をつき、裏口の従業員出口から出させてもらった。タクシーを捕まえて、乗り込むと「とりあえずおもろまちまでお願いします」と言って車を発車させて貰った。

「ここまでは完璧な脱出だった。一安心だよ」

「でも、佳子先生が裏切るってことないんですか？」

「それは大丈夫。初級鑑定師はあくまでもお客さんだから意識低いだけ。さすがにトップ鑑定師ともなると、大企業の人事とかのお仕事もやられるから守秘義務がある。それを守れないようなら占術師を名乗る資格はないね」

祈織は安心した様子でこちらを見つめている。手を取って握り締めてきた。

「大丈夫だから」

そう言うって安心させるつもりが実は自分自身に強く言い聞かせている。

深夜過ぎ、それぞれの夢を乗せて、タクシーは夜の帳を切り裂いて走る。魂と魂は強く惹かれあう。終わらない夢。安全領域から抜け出した先に待っているのは一体どんな未来だろうか。

おもろまち駅から5分ほどで佳子のマンションにたどり着く。10階建ての最上階が佳子が借りている部屋で、一階にはテナントでケーキ屋さんが入っている。

祈織からコンビニで買ってきてもらったばかりのTシャツはすでに汗だく。後でまたコンビニに行かなくてはならない。決していい給料を貰ってるわけでもないのだが、いざという時のため最低限の貯金はしている。一年間に使うお金が約200万円だったとして、100万円の貯金があれば半年は暮らせる。だから、貯金が100万円をきってくとレッドゾーンなのだ。

佳子の部屋の前まで来て、インターフォンを鳴らそうとしたが、占術の総帥が寝ているかもしれないと思いなおし、LINE通話をした。佳子はすぐに通話に出て、玄関のドアを開けてくれた。

マンションなのに庭があるのは、最上階が特別な人間しか住めないという証だろう。

「暑かったでしょう。どうぞ部屋の中へ」

佳子と言う。

「こんな時間にいきなりすみません」

アキラが非を詫びると

「まあお互い様じゃない」

佳子は口に手をあててせせら笑う。

この部屋は3LDKの間取りだが、82・86平米もある。リビングルームだけでもやく14畳の広さだ。アキラが借りているアパートがすっぽり入ってしまう。ダイニングに

は6人掛けのテーブルがあり、その奥に寝室、右手にリビングルーム、玄関の方にも部屋がある。アキラがはじめてこの部屋に来た時には、若くて可愛い家政婦が使っていた部屋だ。その家政婦は結局は鑑定師になった。占術師KAKOという源氏名で活動していたのだが、ある日を境にして突然、生まれ故郷の広島へと帰って行ってしまったらしい。KAKOはアイドル的人気を誇っていただけに、もったいないことをしたものだと思う。

佳子はダイニングのテーブルの上座でパソコンを開いて作業をしていたようだ。促されるままに、祈織が佳子の近くに座り、出口に近い下座にアキラが座った。

「それで、ライトって人が逆恨みして追っかけてきたわけね？」

「そうなんです。ライト君に経済的余力がないと踏んで甘く見ていたら、詩音が裏切って彼のスポンサーになってしまった」

そこまで言うとはアキラは興奮を抑えるため、水を一気に飲んだ。祈織は二人のやりとりを静かに聞いていた。

「実は最近、占術界隈では大変なことが続いているのよ。一生涯変わらないはずの鑑定書が突然変わる。それを運命転換っていうんだけど、このところ運命転換する人が急激に増えてね」

「運命転換ですか？」

アキラは興味津々で尋ねる。

「そう。これが起きると今までの鑑定書は役に立たなくなります。ある日を境にして運命が変わるので、当然、これまでの予測は何の意味ももたなくなります」

「ひょっとして、僕らの運命も変わったかもしれませんね」

「天運鑑定、出してみますか？」

「お願いします」

天運鑑定とは運氣アップの方法が77項目に渡って書かれている鑑定書のことである。一昔前までは、鑑定料込で2万円という破格の値段でお出ししていたが、様々な事情から5万円へと値上げされていた。それだけ、この琉球占術の価値が上がったということだ。佳子はアキラの鑑定書を眺めている。マジカルカラー白の祈織もアキラの影響を受けて、スピリチャルな世界への興味関心が向いてきたようだ。

「アキラ君大変です！」

クールな佳子が目の色を変えて言う。

「え？」

不意を突かれたアキラはそれしか言葉が出なかった。

「アキラ君は知らぬ間に、運命転換してます」

「やはり……」

「マジカルカラー【黒】深層心理【純】マジカルナンバー【1】ラッキーナンバー【9】行動力約8億以上あり、ハートレベルもかなり高いです」

「やはり、ラッキーナンバー【9】ですか……」

「ええ、性に関しては奔放すぎます。でも、それが魅力を高めるためのアクションですから、どうか卑下しないで下さい」

ラッキーナンバーとはその人のエッチ度が解る鑑定項目だ。単純に、1から9まで数字がある中で、より大きくなればほどエッチということになる。アキラはこれまでラッ

キーナンバー【1】とされていた。それは潔癖であるということになるのだが、リアルな行動と照らし合わせてみると当たっていない。詩音のヴァージンを奪うだけでなく、涼子や祈織までも、その毒牙の犠牲になった。もっとも、誘ってくるのはいつも相手の方からなのだが。それにしても運命転換をして、ラッキーナンバー【9】になっていたとしたら、合点がいく。

「祈織さんの天運鑑定もいたしますか？」

佳子は祈織の方を見て言う。

「はい！ ぜひお願いします」

「アキラ君、悪いけれど、冷蔵庫にコーヒーやジュース入っているので祈織さんにお出ししてあげてください」

「了解です」

「アキラ君が大好きなペプシコーラも入ってるからお好きにどうぞ」

「先生は何を飲まれますか？」

「私は、ホットコーヒーをお願いします」

そう言って佳子はパソコンへと向かう。

アキラは「オレンジジュースかアップルジュース、あとグレープフルーツジュースとか色々あるけど何がいい？」と祈織に尋ねる。

「できればアイスコーヒーをお願いします」

「ミルクとガムシロップは？」

「ミルクだけお願いします」

アキラはトレイにホットコーヒーとアイスコーヒー二つを用意した。コーラは大好きだが、そろそろダイエットのため糖質は控えなければならない。

アキラはテーブルに飲み物を置き、キッチンにトレイを返しに行くとき

「これは！」

という佳子の驚きの声が聞こえた。佳子はマジカルカラー白だが、ラッキーカラーが青なので、意外にクールだ。バカな態度を嫌う。その佳子がびっくりするほどの何かが起きている。アキラは怖さを通り超えてワクワクを抑えきれなかった。

「祈織ちゃんのマジカルカラーも黒に変わってます！ 運命転換です！」

佳子は興奮して言う。一体、どんな占術結果が出たのだろうか。

「黒ですか？ 実はなんだか最近、黒が気になっていたんです。では看護師が天職というのも変わりましたか？」

「いえ、天職のキーワードは医療と出ているので、看護師が天職なのは変わりません」

「どんな点が変わりましたか？」

「マジカルカラー黒というのは、一番成功に近いカラーなのです。けれども、成功に到るまではやはり幾つもの試練がつきものです。芯がありぶれない強さを持っています。これまでの祈織さんとは全く性質が変わっています。例えば、祈織さんのマジカルナンバーは【5】から【9】に変わったのですが、これは深層心理に置き換えると【宙】となります。宇宙の宙ですね。この深層心理というのは、心の奥底で求めているものが解るのですが、これまでは癒しや優しさを求めていたのに対して、【9】はワクワクを求めて行動する傾向性が強いです」

「ワクワクとは好奇心の強さのことですね」

「はい。そうです。そして、静寂を好み、忍耐強い感性を持ち、裏表がない神のしもべのようなピュアな心を持っています。天界にもご縁を持っているでしょう」

「もしかして、アキラさんと出会ってから運命が変わったということですか？」

「祈織さんのご指摘は当たっています。アキラ君がいつからマジカルカラー黒になったのかは解りませんが、マジカルカラー黒になったアキラ君と行動を共にするうちに影響を受けて変わったと考えられます。ただし、よほど強い出来事がなければこうはなりません」

佳子のはっきりと断言した。アキラはアイスコーヒーを飲んで逸る心を落ち着けた。

「先生、バイオイズムはどうなっていますか？」

「言っているのかしら？」

佳子はうつむき加減で言う。祈織は毅然として「どんな運命でも受け入れます」

「そうね。解ったわ。一言でいえば、今起きている一連の事件は起きるべくして起きています」

「やっぱり運氣悪いんですね？」

「まあ、運気の良い悪いを語るのはあまり好きじゃありませんけれど、すべては捉え方次第で大きく未来に差がでます。これをチャンスだと思えばその先の未来は明るいのです。ピンチをピンチのまま最悪と感じて、何もしなければ未来も、今の延長線上のままです。どちらに転ぶかは、すべて考え方、解釈、そしてそれによる判断です」

「考え方、解釈、判断………大事ですね」

祈織は落ち込むと思っていたが、むしろこの状況にワクワクしてるようだ。それは深層心理【宙】の特徴でもある。

「それで、詩音ちゃんに居場所がバレたのは、たぶんアキラ君のスマホがハッキングされていたからだと考えられます」

「やっぱりそうでしたか。横浜にいた時からおかしいとは思ってました」

「本当は犯罪なんですけどね。まあ浮気調査という名目で探偵に依頼する人もいますから。警察は動かないでしょうね。頭のいい子です」

「本当に。敵に回すと厄介です………」

アキラが腕を組んで言う。腕を組むという行為は心理学的に警戒心の現れとされている。無意識のうちに、詩音に対する愛憎が交差しているのだろう。

「今日はスマホの電源を切っておけば大丈夫ですが、明日、明後日以降は、たぶんこの部屋にも訪れる可能性があります。うちにとって詩音ちゃんは上客ですし、彼女のお陰で東京進出できたので一生の恩人でもあります」

「そうですね。詩音が何を考えているのか解りません」

「それはアキラ君に対する愛でしょうね。ライト君と一緒に行動しているのも嫉妬させる狙いがあります」

「………」

アキラは言葉にならなかった。

裏切ったとはいえ、自分との愛を貫くために追っかけてきたのだから、些細な喧嘩のことなどもうどうでも良いと思った。ただ、今でも愛しているのかと聞かれたら、涼子と祈織と詩音の中で一人は選べないのだ。それはエッチ度が解るラッキーナンバー【9】が

指し示すようにセフレと割り切れれば良いのだが、セックスだけではない特別な想いを三人に対して抱いているのだ。

「さて、困ったものですね。ライト君は鑑定上どうなんですか？」

佳子がアキラに尋ねる。

「琉球占術だとマジカルカラー黄色で深層心理が純です」

「黄純かぁ。まあ楽しいことだけを追い求める性質なので、意外と話し合えばわかってくれるかもしれませんが、純がキレると一番怖いですからね」

「ですよ。僕の周囲でも深層心理【純】は、怒らせると一番手が付けられません」

「ちなみに天輝地は？」

「北です」

「ありゃ〜。来てはいけない方位に来てしまったようですね」

天輝地とは運氣があがる方位のことである。その逆は運氣が下がる方位で判断を誤る傾向にある。もしも逆の方位に動かざるを得ない時は、天輝地やラッキースポットを経由することで凶作用が相殺される。

「ちなみに、ライト君のパーソナルは？」

「全です」

パーソナルとは本人が一番自覚しやすい性格のことだ。パーソナル【全】は、兄貴肌姉御肌で面倒見がよく、頼られることで本領を発揮する。仕事において、全体把握に優れていることから【全】と名付けられた。

「しかも全なんですね。アキラ君が怖がる気持ち解りました」

「違う占術でも同じような結果が出ます。どうしたら回避できるのかを必死に考えています」

アキラは言う。

祈織はさっきから黙って聞いているだけだが、かなりマニアックな話が続いたので眠くなったのかもしれない。

「祈織さん、ベッドがいいかしら？ それともソファで眠りますか？」

佳子が気を利かせて言う。さすがはトップ鑑定師だ。気遣いも一流である。

「はい。大丈夫です！ 全然眠くありませんから……」

「祈織ちゃん、少し仮眠とった方がいいよ！ 僕たちは寝なくても大丈夫なように訓練されている占術師だから、僕らに合わせてると身体壊すよ」

アキラが諭すと「では、ソファお借ります」と言って、祈織はリビングルームへと向かった。佳子が奥の部屋からタオルケットと毛布を持ってきてそれを横になっている祈織にかけた。真夜中の占術談義はここからが本番なのだ。

23

「それで、アキラ君。明日以降どこに逃げるんですか？」

佳子が尋ねる。

「まだ決めていません。というか決めあぐねています」

アキラは行先のだいたいの見当はつけていたが、佳子には黙っておくことにした。

佳子が裏切ると言いたいわけではないが、100パーセント信頼しているわけでもない。なんだかんだ言ったって所詮は占い師だからだ。人は自分で運命を切り開いていける力が備わっている。人生において大切なことはそんなに多くない。好きな物を食べて、好きな服を着て、好きな場所で暮らして、好きな人たちと笑って過ごす。それ以上、何を求めるだろうか。占術は科学だと考えているが、決まりきった運命などない。ゆえに、最後は人間臭い戦いになるだろう。電話も使えない。メールもできない。そんな昭和の時代みたいな話が現実には起きている。

「明日、詩音ちゃんはここに来ると思います。私からは断れませんので、それだけはどうかが了承下さい」

佳子は見抜いている。アキラが嘘をついたことを。本当に頭がいい人は要点だけしか話さないし、1言え10を理解する能力がある。佳子もその一人だろう。

「かしこまりました。こちらもあえて行先は言いませんので、お気になさらず」

アキラはマジカルカラー緑から黒に運命転換している。上司に対してこんなにはっきりものをいうようになったことに気づき始めている。

「そうそう。アキラ君の運命転換のお話ですが、実は、生まれた病院を調べたところ、現在は2つの病棟があるみたいなのです。緯度と経度の問題で、もし仮に、生まれた場所の緯度が道一本分でもそれていたら、緑か黒か解らなくなります」

「東京蒲田病院は建て替えや増設があり、当時のことは親に聞いてもよく解らないと思います」

「そうでしょうね。ですから、緑と黒をうまく使い分けて下さい。ラッキーカラーは赤で変わりませんから」

「解りました。しばらくは黒で生きていきたいと思います」

マジカルカラーは全9色ある。白、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、黒の順番だ。これを数値化すると、白は【1】となるし、赤は【2】黒ならば【9】になる。自分自身がもともと持って生まれた色があり、その色を身に着けることで、自分らしく生きていくことができる。

「占術はあくまでも幸福に生きていくための羅針盤です。何かの事件を解決したりできるほど、世の中の仕組みは単純ではありません。そのことをよく覚えておいてくださいね」

「先生、最悪は死人が出るかもしれなかったんですよ。それでも、占術を事件解決に使うなど仰いますか？」

「いえ、そうではありません。最近、アキラ君のメール鑑定の文面を観させて頂いていますが、当てることばかりに意識が向いて、クライアントさんの恐怖を煽るような言葉まわしになっています。この占術は本来怖いくらい当たりすぎるがゆえ、封印された歴史があることはご存じだと思います。もしもこの状態が続くようでしたら……」

佳子は手を組んだ。

「協会をやめろ、と？」

「言いにくいですが、そういうことになります」

「先生、解りました。その時は僕の方から協会を去ります。ただ、ここで見聞きしたことで経験・体験したことを小説に書くことだけはお許し下さい」

「解っています。そういうと思ってアキラ君には教えていないことが山ほどあります。もし、アキラ君が小説家になる夢を捨てて、総師に仕えるというのなら、その時は悪いようにはしません。まあ、一度くらいは夢のために協会を離脱しても良いでしょう。また、気が向けばいつでもご相談に乗ります」

「ありがとうございます。そのお気持ちだけで十分です」

「では、仮眠を取りますか？ それとも夜食でもお作りしましょうか？」

「久しぶりに佳子先生の夜食が食べたいです」

「朝までコースですね。アキラ君もだいぶ占術師らしくなってきて嬉しいです」

そう言って、佳子はキッチンへと向かった。アキラは孤独の中、必死に行く先を考えていた。

24

アキラは一睡もせず、祈織が起きるまで読書していた。

AM4時過ぎ、佳子は朝シャワーを浴びている。スマホの電源もいれられない状況だが、それはそれで快適に過ごせるものだ。しかし、GPS機能をオフにしたところで、居場所を特定されている以上、もう遅いのである。最初は復讐に来るといったって、自分自身が相手に好きなだけ殴らせれば気が済むと思っていた。そして、そのあとで、警察に行けばいい。ライトの性格的に前科がついてしまえば祈織のことは諦めるだろう。しかし、ややこしいことになってしまった。もしも、祈織と身体の関係を持ってしまったことが明るみになったら、ライトは正気ではいられないであろう。詩音だって同じだ。一体、祈織はどうしてこんなヒモ男に身を任せたのだろう。アキラは幾つもの秘密を抱えながら生きていかなければならない宿命なのだ。

「いや～生き返った。アキラ君もシャワー浴びたら？」

「いえ、祈織ちゃんが起きたらすぐに出ますから」

「そうなのね」

佳子はバスローブを巻いたままだ。ふくよかでエロい体形をしている。さすがに目のやり場に困る。こんな時、スマホでもあればやり過ごせるのと思う。

佳子がバスローブ姿のままアキラの隣に座った。

ローズの薫りがしている。海外製のボディソープを使っていることは知っているが、一般人では手に入れないルートから買っているらしい。

佳子はアキラの耳元に顔を近づける。

「ねえ、試してみる？」

佳子はアキラの股間を触って言った。

「さすがにこんな場所じゃ……………」

アキラは戸惑いを隠せない。過去に佳子から冗談で誘われたことはあったが、佳子は占術の総師の奥さんであるし、さすがに不倫だけはしたくない。

「いいから、そのままにしてて」

佳子のしなやかな指先がアキラのジーパンのファスナーをゆっくりおろしていく。ボタンを外され、パンツごと剥がされる。半だちのペニスをなまめかしく舐める。

「っく……………」

アキラは思わず声を上げそうになって右手首をかんだ。

佳子は弄ぶように舌先で我慢汁を拭った。ゆっくりバスローブを脱ぐと大きなおっぱいでペニスを挟む。

頭が真っ白になる。酒でも飲んだかのように脈拍は上がっていく。吐く息は荒い。

佳子は顔を近づけて耳を舐める。
「私の可愛い坊や。一生私の奴隷よ」
そう呟くとまたペニスを咥えて激しくしゃぶる。
アキラの顔がゆがむ。佳子は下から見上げる。
「そうよ、その顔が見たかったの。もういいよ」
佳子はそうとうと根本までを包み込み、舌で激しく刺激する。
(だめだ！)
アキラがそう思った瞬間、白濁の液体が佳子の口内に発射された。どくどくと痙攣する。
佳子は精子を飲みこんだ。
「次は私の中でいいね」
佳子が小悪魔の視線を投げかけて言う。
「……」
一気に眠気が襲ってきた。
奥では佳子の旦那が寝ていて、すぐ横のリビングのソファでは祈織が寝ている。安い
酒でも飲んだ後のような、悪酔いをしている。蒲田に帰りたい。ライトさえいなければ。
アキラはライトを恨んだ。

早朝に、祈織の手を引いて佳子のマンションを後にした。朝の太陽が目にも染みる。スマホがハッキングされている以上は、いずれ新しいスマホにして携帯番号も変えなければ安心できない。でも、まずは詩音がライトへの支援を打ち切るにはどうしたらよいのかと考えていた。

タクシーを止めて「アメリカンビレッジまで」と告げる。

車は58号線を北上していく。窓を開けると海風が吹いて気持ちいい。ほんのり潮の薫りがする。天気は良好。こんな日は何もかも忘れて遊び倒したい。まずは、ホテルでシャワーを浴びて、祈織の衣服も買ってあげたい。

「運転手さん。アメリカンビレッジの近くでおすすめのホテルありますか？」

「色々あるさ〜。ご夫婦なら、アメリカンビレッジ内にあるベッセルホテルなんかおすすめだね」

運転手のセリフに祈織はニヤニヤする。

「じゃあそこでとめて下さい」

「わかったさ〜」

沖縄訛りの言葉を久しぶりに聞いてなんだか安心する。

アメリカンビレッジに到着し。ほどなくしてホテルへと辿りついた。現金でお会計をし、おつりから缶コーヒー2杯分ほどのチップを渡した。運転手の説明によるとベージュ色した建物が本館でオレンジ色が別館らしい。ちなみに本館がおすすめということだった。

受付でチェックインをする。とりあえず、プレミアムオーシャンビュートインを一泊だけとって、もしかしたら連泊するかもしれないと伝えた。フロントデスクには、お菓子のサービスがあり、ウェルカムドリンクもあるようだ。さんびん茶とお菓子を持って、アキラのラッキーナンバーである9階へ上る。

南国らしい白とオレンジを基調としたルーム内には、ベッドが2台あり、ゆったり座れそうな椅子も2つある。テレビや作業できそうなカウンターテーブルまで揃っていて、この部屋はできれば涼子と遊びに来たかった。

「祈織ちゃん、先にシャワー入っておいで」

「え？ いいんですか？ じゃあお言葉に甘えて」

アキラたちは特別な荷物などもたない。あるけど使えないスマホと財布とタバコ一式、そしてメモ帳だけである。まるで都会に住む遊牧民のようだ。しかし、スマホが使えなくなって、仕事が滞っている。メール鑑定は佳子が代わりにやってくれているが、クライアントさんからの連絡に関しては、早く返信しなければ信用を失うことにも繋がりがねない。

アキラはもう一度、ライトの鑑定書を思い起こしながらメモに書き起こした。
マジカルカラー【黄色】深層心理【純】パーソナル【全】ハートレベル【4.9】行動力【8千万】

見れば見るほど、キレやすいことが解る性格である。しかし、行動力が低い。行動力が高い詩音に言われるがまま、ついてきたことが解った。けれども、ライトを一度でもキレさせたらただでは済まない。祈織の話では武器を使うことも厭わないという。しかも、祈織を酒ビンで殴ろうとしたのは事実である。

祈織が浴室から出てきた。一糸まとわぬその姿に、はっとした。

祈織はどんどん近づいてくる。

「ねえ、抱いて」

「………」

アキラが戸惑っていると祈織の方からぶつかるように抱きしめてきた。ベッドに倒されると、祈織が強引にTシャツを脱がす。

「祈織ちゃん。落ち着いて………」

「さっき佳子先生とエッチなことしてたくせに」

気づかれていたのか、アキラは思った。

これじゃどっちが男なのか解らない状況である。

祈織はキスでアキラの唇を塞ぐ。髪の毛をむしられ、首を絞められ、完全に犯されている。

「女に犯されるってどんな気分？」

祈織は挑発的な目つきで言う。

頭に血が上ったアキラは、祈織の髪の毛を掴み、反転して強く抱きしめた。

「もう後のことはしらねえぞ！ 中出ししてやる」

アキラは祈織の股間に手を伸ばす。すでに濡れていた。

フル勃起したペニスを祈織の中へ入れる。

そのまま、5秒ほど静止すると、祈織の膣がぎゅっと締まってくる。

ゆっくりピストンしていくと

「もっと激しく！」

祈織は叫ぶように言う。

「もっと！ 壊して！ めちゃめちゃにして！」

アキラは正気を失っていた。

無我夢中で突き続ける。このまま殺してやりたいとさえ思った。

祈織は狂い踊る。アキラのダンスはピークを迎えようとしていた。

「イク！」

そう感じた刹那、祈織の中に精子がどくどくと流れていって吸い込んだ。

アキラはペニスを抜き祈織の隣に勢いよくダイブした。

(もう何もかもおしまいだ)

占術師として積み上げてきた地位も名誉も信頼も、何もかも。

一睡もしていないアキラは最後の欲を使い果たしそのまま深い眠りへと誘われた。

26

9月29日、中秋の名月と満月が重なる日。ライトと詩音は佳子の部屋にいた。占術の総師である松田祐介も、星崎財閥のご令嬢詩音の接待に必死だ。ミラクルスポットが東京に進出できたのも詩音の力添えがあってこそだったからなおさらだ。事実上、アキラは占術協会を敵に回したことになる。ダイニングテーブルの奥に祐介と佳子が座り、対面する形で詩音とライトが着席した。

「詩音ちゃん、わざわざ沖縄まで来てくれてありがとう。連絡くれれば空港まで迎えに行ったのに」

マジカルカラー黒の祐介が言う。

「いえ、ちょっとアキラを懲らしめてやろうと思って遊びに来ただけですから。お気になさらず」

そう言って詩音はオレンジジュースを口にした。ライトはひどく緊張している。一介の建築作業員が気軽に遊びに来れるような部屋ではないからだ。肉体労働者と頭脳労働者は話が合わない。事実、祐介も佳子もライトに関しては興味ない態度をとっている。それでも、詩音が連れて来ている以上は、大切なお客さんである。

「ライト君は、本当にかっこいいね」

総師が持ち上げるとすかさず佳子が「本当にイケメンよね」と合いの手を入れる。

「いえ、僕なんかただの作業員ですから……」

ライトが卑下すると詩音が

「重要なお仕事じゃない。もっと自信を持って！」と励ます。

「それで、アキラ君に対してネガティブな感情を持っているのはなぜですか？」

佳子がライトに尋ねる。ライトは無言のうち頭の中を整理した。そして重い口を開いた。

「僕にとっては祈織が全てなんです。子供の頃の話ですけど、結婚の約束もしました。その後、事情があり田園調布から引っ越して、祈織とはなかなか会えなくなりましたが、彼女とはじめて出逢った時の電撃が走るような体験を、ずっと大切に生きてきました。祈織と結婚できるなら、他に何もいません。お金はありませんが、いつかビッグになってやろうと決意してバンドをやっています。祈織ともう一度手を繋いで歩きたい。そんな僕のささやかな夢をアイツは奪った。純潔の祈織のヴァージンを僕から奪い去った。もしそれが本気の恋愛なんだったらまだ諦めはつきます。しかし、アイツは他にも複数人の女と関係を持っている。単なる遊び人だ。そして、僕がもっとも可愛がってきた義弟の命を救うチャンスまでも奪った。何があってもアイツだけは許せません。殺したいくらい憎いです」

ライトは全ての心情を吐露した。祐介と佳子はあきれ顔で聞いている。唯一、詩音だけが同情的な表情を浮かべている。場の空気が悪くなって皆静まり返った。話を聞けば聞くほど、単なる逆恨みでしかない。そのことが本人には解っていない。しばらくして祐介が口を開いた。

「そろそろお昼だから何か食べながらお話ししよう」

「カレーでいいかしら？」

佳子が言うとライトは頷き、詩音は「お願いします」と返した。

「まあライト君。外の空気でも吸ってきたらどうかな。タバコは吸うの？」

祐介が言うとライトは申し訳なさげに「はい」と答える。

「詩音ちゃん。悪いけれど、ベランダに灰皿あるから案内してあげられるかな」

詩音は少し面倒くさそうに

「ライト君、ベランダを出て右曲がるとエアコンの室外機あるのね。その下に灰皿おいてあるから適当にやって」と言った。

「それじゃお言葉に甘えて……………」

バツが悪そうにライトはベランダへと向かう。

「外じゃ吸えないから、2本くらい吸っておいで」

去り際に詩音が言う。

ライトが完全に消えた後、ダイニングは祐介と詩音の二人きりになった。

「詩音ちゃん。アキラ君が運命転換したことは聞いた？」

「いえ、なんですか？ 運命転換って」

「簡単に言えば、運命が変わるんだよ。ごくまれに、一生涯、変わらないはずの鑑定書がある日突然変わることがあるんだ」

「え？ 鑑定書ってそんなに簡単に変わるんですか？」

「いや。ごく選ばれた一部の人間しか変わらない」

「アキラは選ばれたってことですか？」

「そう。占術の神様にね」

祐介はアイスコーヒーを飲む。詩音は呆然としている。

「運命転換した人は、本当に指で数えるくらいしかないんだ」

詩音はごくりと生唾を飲んだ。

「それで、アキラの鑑定はどう変わったのですか？」

「残念なお知らせなのだけれども、アキラ君は一人の女性と結婚することは難しい。この一夫多妻制が認められない国で大奥を作ろうとしている」

「大奥って。そんな馬鹿な……………」

「いや、彼は間違いなくこの旅の最中に祈織ちゃんとも肉体関係を持ったはずだ。それが残念なお知らせなんだよ」

「いくら浮気性だからって、そんな……………」

詩音は頭を抱えて言う。

「ショックな気持ちは解る。なぜならばアキラ君は運命転換するまでは間違いなく詩音ちゃんだけを愛していた」

「言にくいですけど、処女を捧げたんです。アキラの浮気が発覚したのは付き合っ

7年目のことでした。それまでは、全く気付かなかった」

「具体的にいつごろから鑑定が変わったのかは、今となっては知る手段がない。しかし、そんな彼でも愛せますか？」

詩音は言葉に詰まる。愛している気持ちは本物だ。けれども、結婚したとして、こんなにも寂しい気持ちを抱えながら生きていかなければならないなんて。

「アキラのことは愛しています。浮気されても、別れを切り出されても、例え祈織ちゃんと身体の関係を持っていたとしても、私にはアキラが必要なんです。だから、ライト君を利用して沖縄まで追っかけてきました」

「そんな彼をライト君は殺したいくらい憎んでいる。そして、ライト君に助け船を出したのは、他でもない、詩音ちゃん自身なんだよ」

「……」

二人の間に沈黙が訪れる。しかし、祐介は話を続けた。

「もう少し早く相談してくれていたら、まだアキラ君と寄りを戻すためのご提案もできた。けれども、今のアキラ君は何をしでかすか解らないくらいの運気に入っているんだよ」

脅すように祐介が言う。

「わたし、一体でどうやって責任を取ったらよいのか……」

詩音はうなだれる。

「悪いことは言わない。彼のことは諦めて、また運命の人を探した方がいい」

「そんなの出来ません。アキラがいない人生なんて死んだ方がマシです」

詩音の心は昂っていた。この愛を誰にも止めることはできない。ライトだって理屈ではない何かに動かされてここにいる。立場は違えども、詩音のアキラに対する思いと、ライトが祈織に対して抱く思いだけは共通のものなのだ。

「詩音ちゃんの気持ちは解りました。では、アキラ君の居場所を教えます」

「え？ アキラのGPSは全て解除されていますよ。ハッキングも不可能です」

「彼はおそらくアメリカンビレッジに潜伏しています」

「占術ってそんなことまで解るんですか？」

「占術と言えは聞こえが悪いかもしれませんが、うちの占術はプロファイリングです」

「FBIが使っているというデータを基にした予測のことですね」

「そうです。アキラ君の行動パターンは、彼とはじめて出会った時から今日まで、全てデータとして残っています。まあ、交通事故にでもあってない限り、90パーセントの確立でアメリカンビレッジに向かいました」

「天気予報みたいですね！」

詩音は笑う。

「天気予報も宇宙からの衛星から見た空模様と統計学を使って、ここまでの精度になりました。みな、天気予報は参考にしてはいるはずです。占術は運気を読み解きます」

「ええ、アキラからも散々聞かされています。では、アメリカンビレッジにいることは解りました。しかし、ライト君の復讐を終わらせるにはどうしたら？」

「そのことに関して、詩音ちゃんが気に病む必要はありません。アキラ君がもうすでに考えを巡らせて解決するでしょうから」

「アキラってそんなに頭良かったでしたっけ？」

詩音は腕を組んで疑問符を投げかける。

「学歴は確かに中卒かもしれませんが。けれど抜群に頭が良いです。なぜなら、彼は私の後継者になる予定の男でしたから」

祐介は嬉しそうに言った。

ライトがベランダのドアをガラガラと開ける音がした。

佳子もキッチンからカレーライス را diningテーブルへと運んだ。

ライトの身体がタバコ臭いが、詩音は無視することにした。アキラだってかなりのヘビースモーカーだからだ。けれど、アキラはセックスをした後はタバコを吸わず、ピロートークやマッサージをしてくれる。そんな過去が永遠だったら良かったのにと、詩音は思う。佳子が昨晚から煮込んであったというカレーは本格的な味がする。スパイシーなのにほろ苦くて甘酸っぱい。

詩音は過去に想いを馳せる。はじめてアキラとキスをした時と同じだ。はじめて会った場所は帝国ホテルのラウンジだった。そのまま無理やりアキラをタクシーに押し込めて沖縄へと旅立った。無理言って婚約者という設定にしてほしいというお願いにも快く引き受けてくれた。ハイアットリジェンシーのスイートルームに泊まって、3つ星ホテルのレストランにて誕生日祝いをしてくれた。忘れもしない、2015年9月13日からたった数日で、産まれてはじめてアキラとキスをして、彼氏彼女って関係性になって、その晩、処女を失った。はじめてのセックスはとても痛かったけれど、それ以上に、筆舌に尽くし難い、確かな幸福があった。アキラがいるだけで幸せだった。そんなアキラをわたしは裏切った。最低な女だ。

「どうしたの詩音ちゃん？ 食欲ないの？」

佳子の言葉で詩音は我に返る。

「いえ、美味しすぎてゆっくり味わってたんです」

詩音の目から一筋の雫が流れおちた。

隣のライトにはその涙は見えていない。祐介と佳子が共有する秘密だ。この二人の間に愛があるのかは解らないが、仮面だったとしても夫婦は夫婦である。共に同じ仕事をし、同じ空間を共にし、どんな時も一緒。アキラが他の女と寝たとしても、構わない。最後はわたしがアキラを守る。たとえ、この身が減じようとも。罪を被ろうとも。

ライトはスープでも飲むかのようにカレーを食う。このまま復讐のことなど忘れてしまえばいい。詩音が切に願った、その時、diningテーブルに置かれたライトのスマートフォンが鳴った。

「ん？」

ライトはもうすでに腹いっぱい眠気を感じていたが、発信者の名前を見て一気に怒りがこみ上げてきた。

発信者の名前は【橋本アキラ】だった。

ライトはアキラからのLINE通話に出た。

「よおライト！ 元気か？」

「はぁ？ なんだお前！」

「いるんだろ？ 詩音？」

「居ちゃ悪いのかよ？」

「んで、どうだった？ 詩音のおっぱいでかくてうまかっただろ？」

「まぁな。そっちこそ祈織と寝たんだろ？」

「……」

「何とか言えよ、コラ！」

「馬鹿と話してる暇はないんだけどな」

「祈織のヴァージン奪ったんだろ？」

「……あほだな。お前。さすが竹田の部下だよ」

「もう関係ねぇよ！ あんなタコ社長」

「あら、いいのか？ お前？ 竹田ん家は代々ヤクザの家系だったんだぞ？」

「はぁ？ それがいったいなんだっていうんだよ？」

「俺だけじゃなく竹田を敵に回したら蒲田歩けねぇぞ？」

「だったらなんだよ？ あんな街こっちこそごめんだぜ！」

「まぁ、聞けって。場合によっちゃダブテックの元宮を紹介してやるよ」

「さっきから上から目線で言いやがって！ 必要ねぇよ！」

「いいのか？ 元宮ってお前が大好きなロックバンドの親友だぞ？」

ライトは一瞬ひるんだが

「うるせえ」

と言った。

「ってか、祈織ちゃんと結婚したいんだって？」

「だからうるせえよ！ 関係ねぇだろお前には！」

「ってかさ、祈織ちゃんてヴァージンだなんて誰が言った？」

「祈織は昔から純潔なんだよ」

「あっそ」

「……ヴァージンじゃねぇってのか？」

「それは自分自身で確かめてみたらどうなんだ？ セックスして血が出たら間違いなくお前が初めての人だよ」

「そんなことできるわけねぇだろ」

「どうした？ さっきまでの威勢のよさは？」

「……………」

「おい。スピーカフォンにしろよ。詩音にもこの際言っておきたいことがある」

「スピーカフォン？ 冗談いうなよ。なんでお前のお願い聞かなきゃならねえんだ？」

「まあ、いいや。後で詩音にLINEすりゃいいだけだから」

「なんなんだよ！ さっきから！ おちょくりやがって」

「真実を知りたかったら今日の夜、浦添にある市民球場に來い。祈織ちゃんもここにいる。ただし、お前が來なかつたら祈織ちゃんのヴァージンは俺が頂く」

「っざけんな！ 浦添市民球場だな？ 何時だ？」

「9時に來い。解りやすく正面玄関で待っててやる」

「首洗ってまってるよ！」

「ナイフも持って來いよ。じゃあな！ 素人童貞君！」

がちゃという音と共にアキラとの通話は終わった。

「くそ！」

ライトは自分のスマホを床に叩きつけた。

「ライト君。いかなる理由があれ、他人の家で暴れるのはやめてくれ」

祐介が冷静にいうとライトは「すみませんでした」と謝った。

「アキラだったんでしょ？ 何か言われたの？」

「いえ、男と男の約束ですから。幾ら詩音さんといえ、内容はお話しできません」

詩音はライトをなだめて、財布を取り出す。おもむろに1万円札をあるだけ渡した。

「これで何か美味しいものでも食べて。忘れたほうがいいわ」

「受け取れませんよ」

ライトが突っぱねる。

「いいから。ここまで連れてきたのは私なんだから、車代と宿泊費と思って受け取っておいて。ここから先はお手伝いできないから」

「……………では、お借りしておきます」

ライトは現金十数万円を受け取り「ご迷惑をおかけしました」と言って家を出た。

「大丈夫かしら？」

佳子は心配そうに言う。

「心配いらない。アキラ君はトップ占術師だから」

祐介が言う。

「私もお金おろしにいきななきゃならないので、失礼します」

詩音はライトの後は追わなかった。

アキラは懐かしく想う。

この星空、この潮風の薫り、遠くから聞こえる凜とした響き、揺れては返す波のように高鳴る鼓動。最後の戦いに挑む前に祈織は東京に帰した。

浦添市民球場の正面入り口で静かにライトを待つ。球場はオフシーズンに東京のプロチームが使用している。今日は人気アーティストのライブ中とあって、祭りのような熱気に包まれている。出店ではたこ焼きや焼きそば、綿菓子など売っていて、さっきまではお客さんが長蛇の列をなしていた。今は、この広い正面入り口に一人である。

一発殴られたら勝ち。

アキラはそう読んでいた。横蹴りに対する復讐だったらそんな程度で十分だろう。

たった今、夏の響きから秋の音色に変わった。生涯にわたってこの瞬間を忘れることはないだろう。後ろの球場では歓声がこだましている。瞳を開けて、また閉じる。

いつからだろう？

こんなに性に対して奔放になってしまったのは。

詩音のヴァージンを奪い、涼子や祈織ともに肉体関係を持った。たとえ、殺されたとしても、もう別になんとも思わない。無気力なのだ。

祈織と2回目に肉体関係を結んだとき、うっかり中に出してしまった。

「すぐにアフターピルを買いに行くから」という発言に対して、祈織は「普段からピルを飲んでいるから大丈夫」と言った。果たして本当だろうか。アメリカンビレッジから那覇空港まではレンタカーで送った。もう今頃、東京の田園調布の実家でうまい飯でも食べていることだろう。祈織にはせめて親不孝をさせてはならない。それだけが、アキラの最後の【いのり】である。

どこからか、パトカーのサイレンの音が聞こえて、遠ざかっていった。

「そろそろか……………」

アキラは呟く。

今日は中秋の名月に満月が重なる特別な日。

アキラは空を見上げる。

お月様が雲に隠れて笑っているようだ。この身の上も、行きずりの恋も、これまで犯した罪までもがこのお月様に浄化されて消えてしまえばいい。

まるでこの日のために占術と出会った気がしている。

アキラでもこの先は何が起きるか解らない。そんなことまで占術で解ってしまったら、人間が人間らしく生きていけない。

占術が科学だとするならば、人間が幸福に生きていける方法を説いたのが仏様の教えだ。嘘くさいと笑われようが、どちらも再現性が高いという事実からして立派な科学には違いない。

この占術も仏法も信じる人にだけ奇跡を起こす。

アダムとイブは知恵の実を食べたことから楽園を追放された。だが、もっとも重い罰は未来に希望を持つことだったと、今ならばそう思う。

愛のため生まれて愛のために死ぬ。昔、地元の親友が言った言葉だ。

どこかの映画のパクリだとは思いますが、今となっては言い得て妙である。

詩音、涼子、祈織、三人の運命に翻弄されながら、俺もまた、愛のために死のうとしている。

怖い。

今は全てが嘘のように思えて。

こんな気持ちになるくらいならば、家に引きこもっていた方がマシだったとさえ思う。運命は悪戯なまでに俺を翻弄してく。壊し壊され、流し流され、転がり続けて俺らの未来はどこにある？

アキラは瞳を開けた。シックスセンスが目覚めたとしか言いようがない。

通りの方でタクシーが停まるのが見えた。

(来たか)

解っていた最初から。逃げ続けて迎えた未来が今だ。

向こうから男の影が迫ってくる。

黒ずくめにアーミー柄のバンダナを巻いている。

スキンヘッドにしているが、ライトだ。

「いよお、蒲田のお坊ちゃんまたせたな！」

5メートルほどの間合いを取り、ライトが言う。

「蒲田にゃお坊ちゃんなんていねえよ」

アキラは喧嘩などしたことはない。間合いを詰められると恐怖以外の何物でもない。詩音の言う通り、空手でも習っておけばよかった。

「今更、びびっちゃったか？」

「怖いよ、正直な」

「後悔してももう遅いんだよ！」

ライトはポケットからバタフライナイフを取り出した。そして、刃をアキラに向けて「へへへ」と不気味な笑みを浮かべた。

アキラは解っている。ライトは刺せやしない。

「刺すんだったら、心臓めがけて本気で来いよ！」

「解ってるって。三流映画の見過ぎなんだよ、お前」

いよいよ雰囲気は酔ってきたようだ。これでいい。

「そういえば。教えといてやるよ！」

「なんだ？」

ぎょろとした瞳でライトが言う。

「祈織ちゃんはなあ。俺の女だ！」

語気を強めてアキラが言うと

「ふざけんじゃねえ！」

「最高だったぜ。最後は中だしまでさせてくれてさ」

「てめえ！」

ライトがナイフの柄を腹に当てながら突っ込んでくる。

アキラは身を交わす。右腕にひっかって鮮血が派手に吹き出す。ライトは勢い余って、すっ転んだ。こいつは本気で刺し殺そうとしている。アキラは死をも覚悟する。

その時、

「ライト、やめて！」

アキラが後方を振り返ると祈織の姿があった。

「祈織、なぜこんなやつをかばう？」

ライトは叫ぶ。

「馬鹿じゃない。しね！ 気持ち悪い」

祈織が吐き捨てる様に言う。

「気持ち悪い？ 俺が？ 目は確かか？」

ライトは手を広げて言う。

「その根暗な根性が嫌いなのよ！ 昔からね！」

祈織が語気を強めて言う。

アキラは隙を見てライトのナイフを奪おと狙っていた。でも、まさか東京に帰したはずの祈織がなぜここにいるのかが謎だった。

「もう観念したらどう？」

祈織のさらに後方から詩音が現れて言う。

「詩音？」

「アキラ、怖い思いさせてごめんね。でも、もう大丈夫」

詩音はアキラの傍に駆け寄る。

「ライト。銃刀法違反及び、殺人未遂罪で訴えるわ！」

祈織はわざとライトに聞こえる様に、警察に通報する。

「ライト君。遊びはこれで終わりだ」

出血した右腕を抑えながらアキラが言うと、ライトは一目散に逃げだそうとする。

その時、詩音がローキックをしてライトを転ばせた。すかさず、アキラがナイフを遠くに蹴り飛ばした。

ライトは2、3回、前転するように倒れたが、すぐに逃げていった。

詩音が追いかけようとする。

「待て！ 詩音！ 放っておけ」

アキラが強く言うと詩音は振り返って「でも……………」と言う。

「いいから。後は警察に任せよう」

遠くからサイレンの音が聞こえる。今日はこれで2回目だ。ライブの音と共鳴して、近づいてくる。腕さえ刺されなきゃ遊んで帰りたいかった。

「祈織ちゃん。ちょっと、事情聴取行ってくるから、先、東京帰ってて」

アキラが言う。

「アキラさん、ダメです。腕を心臓よりも高くに挙げて下さい」

「アキラ、大丈夫？ 救急車呼んだから……………」

詩音が言う。

「詩音さん、止血するのでハンカチを下さい」

「なんか、看護師みたいだね」

「忘れたんですか。私は看護師ですよ！ ほら腕をあげて」

祈織の言葉に母親の姿を重ねる。

「アキラ、祈織ちゃんの言う通りにして！」

詩音のセリフはまるで妻のようで笑えた。

そう、ここはアキラの母親の生まれ故郷、沖縄県浦添市にある市民球場。まるで、夢を観ているみたいだった。

「ほら、来たよ！ 救急車」

詩音の声が遠く聞こえる。

「アキラさん大丈夫ですから。少し寝て下さい」

祈織の優しさに涙が出そうだった。

この場所で死ねたらいいなって思っていた。母親の故郷で死ねたらどんなに楽か。

でも、今は生きていきたい。詩音、涼子、祈織の笑顔を見続けていたい。

「もう少しだけ生きてもいいかな？」

「何、言ってんの！ 腕刺されたぐらいで死ぬわけないでしょうに」

「詩音さん、甘く見ちゃダメです。ウィルスがまわって死ぬこともあります」

「ごめん……………」

「いえ、私の方こそ。無事に事件が終わったらお食事でも行きましょう」

「だね！」

詩音と祈織は本来、相性が良い。こうして、バカな占術師のために力を貸してくれる人間が三人もいたことを。忘れずにいたい。

救急車が到着した。

「詩音、悪いけど祈織ちゃんを空港まで送って行って」

アキラは囁くように言った。

ドブとション便が混ざったような匂いがする。

ライトは沖縄県警の拘置所にいた。

「おら！ 起きろ！ いつまで寝てやがるんだ！」

警察官の担当さんがライトの胸ぐらをつかんで言う。

「いくら警察だからってクビになるぞ？」

ライトは言う。

「公務員だからクビにはならねえよ。ほら、布団かたずけろ！」

そう言って担当さんは消えていった。

ライトは布団を畳んで、独房を出る。悪そうな面した被疑者たちと布団部屋で目が合うと、睨むように見てくる。

風呂は夏なのに週に三回しかはいれない。冬は二回らしい。

入れ墨の入ったヤクザ同士が向かい合った独居房の格子に手をかけながら、大声でバカみたいな話をしている。やれ、某・芸能人のケツが最高だったのだ、一軒家持ってるなら2階に住んで下を貸せばいいのだ、そんなの中学生でも話題にしやしない。

ライトはイライラしていた。

なぜ、俺だけが悪いのか？

最初に蹴りを入れてきたのはアイツの方じゃないか、と。しかし、寝る間際には、祈織から言われた「しね。気持ち悪い」というセリフが脳内に無限ループする。

俺は銃刀法違反と傷害罪と殺人未遂の容疑をかけられている。娑婆に出られたとしたら、風俗にでも行きてえな。

毎日、毎日、おんなじことの繰り返し。寝て、えさを貰って。ふて寝して、またえさの時間まで、退屈な時間が続いていく。唯一の楽しみだった漫画さえ、読み終わった後に枕にして寝ていたら、担当さんが入ってきて、ひどく怒られたすえ、禁止されてしまった。まあ、詩音から貰った十数万円の残りの金で、昼には、牛丼、親子丼、かつ丼を選んで食える。しかも、コーヒーやジュースまで飲める。コッペパンはおやつにできるし、冷や飯だが、夜はいちおう幕の内弁当だ。場合によっちゃ、娑婆よりもいい飯を食べているかもしれない。

「33番！ 面会だ！」

担当さんが言う。

(こんな俺に面会？ 弁護士じゃなくて？)

ライトは独居房から出て、担当さんに腕を引かれて、面会室へと階段を下っていく。制服の警察官がボディチェックをしてくる。意味のない時間だ。

「入れ！」

警察官が言う。

面会室へと入ると、見覚えのある顔があった。

ライトは硬いパイプ椅子に座る。

「ライト君。久しぶり」

色黒でグラマラスな胸を強調する白のロングTシャツに藍色のカーディガンを羽織っている。下は淡い色のブルージーンズに星のモチーフが入っている。

「詩音さん。なんの用ですか？」

「あなたにどうしても伝えなきゃならないことがあるの」

「なんですか？」

「あなたのお友達の信平君のことと祈織ちゃんのこと。どちらが先に聞きたい？」

「なぜ？ 信平を知っている？」

「私、こう見えても人脈が広くてね。探偵さんや色んな方に協力してもらって調べてもらったの」

「信平ならもう死んでますよ」

「そう。蒲田の火災で亡くなったんでしたね。ご冥福をお祈りしてます」

「いくら調べたって死人に口なしですよ」

「そう思うでしょ？ 遺書が見つかったの」

「え？ なぜ？」

「信平君は不治の病に侵されていたの知らなかったでしょ？」

「し、信平が不治の病？」

「そう。詳しくは看護師の祈織ちゃんじゃないと、うまく説明できないけど、余命を宣告されていたようなの」

「余命？ そんな馬鹿な！ だって、アイツは死ぬ直前まで牛丼を食ってたんですよ！ カラオケだって行ったし……………」

「悪性リンパ腫……………つまり癌が転移していたの」

「でも、確かにピンピンしてたって！」

「申し訳ないけど、間違いないのよ。祈織ちゃんのツテもお借りして、信平君の電子カルテを見て貰ったわ。そして、信平君の主治医も認めました」

「はぁ？ 医者がそんな簡単に口を割るなんて！」

「これは大人の世界の話だから、ライト君にはまだ早すぎたかしら？」

「……………それで、遺書はどこで見つかった？」

「品川駅のコインロッカーよ」

「なぜ、そんなところに大事なものを……………」

「通常ならば破棄されるけれども、信平君の遺書は目立ってたから捨てられずに警察の元へ届けられた」

「もう、見れないんですか？」

「今は、お父様が嚴重に管理しています。もし、信平君の最後の言葉が見たかったら、ちゃんと罪を償って出てきてください。信平君のお父様にはアキラが話を付けてありますから」

「あいつが？」

「そうです」

「なんで？」

「恐らく、ライト君のことが憎めないからでしょうね」

「……」

「そして、最後になりましたが、祈織ちゃんからのメッセージです」

「いのり」

「もう二度と近づかないで欲しい、と」

詩音はそこまで言うと、面会時間が終わりになった。

「世の中には、素敵な女性がたくさんいます。もし、次回も祈織ちゃんにちょっかいだすようでしたら、今度は私が許しません。誓えますか？」

詩音が言うとしち合いの警察官が「もう面会時間はおわりです」と言って、腕を添える素振りをみせた。

詩音が面会室を出る時に、ふと振り返り

「更生する意思があるならば、お仕事の面倒は私がみますから……」

そう言い残して出て行った。

アキラはレンタカーで詩音を待っていた。

詩音が出てくると、運転席を出て

「ご苦労様」

と言ってドアを開けた。

「どうだった？」

「たぶん大丈夫よ。祈織ちゃんには近づかない」

「そう」

詩音を助手席に乗せ、運転席に座る。イグニッションキーを回した。
車は県道29号線へと向かう。

信号停止している時に、アキラが涼子のジャズアルバムをかけた。

「さあ。せっかく沖縄に来たんだから首里城でも寄ってくか？」

「え？ いいの？」

「いいだろ。別に」

アキラは首里城へと車を走らせる。

10月の首里城周辺は、とても賑わっていた。2019年の10月31日に正殿などの主要施設が消失したが、見学することは可能である。

人込みをかき分ける様に、石畳を登っていく。白く優雅にてっぽうゆりが咲いている。

「あのさ。オレ、運命転換したんだ」

アキラが言う。

「知ってるよ」

「だから、生涯結婚はできないかもしれない」

「そうだね」

「それでも、ついてきてくれるのか？」

「…………目を閉じて」

「はあ？」

「いいから」

言われるがまま瞳を閉じる。

白昼の暗闇の中、唇に柔らかな感触がした。てっぼうゆりの花言葉は、純潔、甘美、威厳、それはまるで詩音のことを指す言葉だと思った。

このやさしいキスは、100万回のキスよりも甘くセツナイ。せめてこの時が永遠のものであると信じたいのだ。

月下の占術師

著 橋本 昂祈

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
